教育學部
資料室

謹
教育文化研究会

國語

高等学校
第三学年用
一

教育文化研究会編

文部省検定済教科書

KC
Ky6

60368
教科書文庫
6
810
46-1949
01304
49682

昭和二十四年十月十日
文部省検定済
高等学校國語科用

國語

高等学校
第三学年用

一

教育図書株式会社

廣島大學
教育學部圖書

中央図書館

広島大学図書
0130449682

目次

○詩歌
一　自己をうたう……ホイットマン……一
二　さわらび……（万葉集）……六
○評論
三　万葉の感動……務台理作……一三
○小品
四　田園風物……ルナール……一八
五　永日小品……夏目漱石……二四
○言語観
六　國語の特質……時枝誠記……三一
○藝術と生活
七　ミケランジェロ……木村素衛……三九
八　生活と文学……青野季吉……四七
○小説
九　赤がえる……島木健作……五七
一〇　富士と水銀……橋本英吉……六六

詩歌

時代と國土との隔たりはあるが、生命感のあふれた二種の歌を学ぼう。一はアメリカ近世の代表詩人の作品、一は日本最古の古典である万葉集の歌である。

一　自己をうたう

ホイットマン

ホイットマン（Walt Whitman）は一八一九年にアメリカのロングアイランドで生まれ、一八九二年に沒した。詩人。大胆素朴な自由詩で、生の神祕と民主主義と自由とを賛美した。詩集に「草の葉」、論文に「民主主義展望」などがある。

一

私はいま自己を披露し、自己をうたう。
しかして、私の衣はまたあなたの衣であるだろう。
なぜといって、私に属するすべての原子は、等しくあなたにも属するのだから。
さまよいがてらに私は私の魂を誘いだす。

夏草の穂をながめながら、欲するまゝに私はよりかゝり、またはさまよい歩く。

私のことば、私の血のあらゆるしたゝり、それはこの大地と大空とから造られた。
こゝに私は両親から生まれ、両親は更に両親から生まれ、その両親はまた更に両親から生まれ、
完全な健康にあって、いま三十七歳なる私ははじめる。
死に至るまで不休であらんことを望みながら。
教義と流派とを無視し、
そのあるがまゝに任せて、しかもそれを忘れることなく、しばらくそれらから退き、
私は善悪にかゝわらず自己に即する、しかして思うがまゝにものを言おう。
本然のエネルギーによる無拘束の自然。

エネルギー energy 人の精力・氣力・元氣などをいう。

二

私は老いたるもの若きものに属し、賢きそれとともに愚かなものにも属する。
他人には無頓着に、しかも他人に留意して、
父性であるとともに母性、成人であるとともに小兒、
粗雑な原料によってつくられ、しかして精微な原料によってつくられ、
あまたの國民中の一つの國民、最小でもかまわない。
北方人であるかと思うと南方人、無頓着でしかも親切な農人として、私はかしこオコーニー河のほとりに住む。
商賣のためにはいつでも出かけて行くヤンキーだ、私の関節は地上第一にしなやかな関節だ、地上第一に屈強な関節だ。
ケンタッキーの住民は私の鹿皮のきゃはんをは

ヤンキー yankee 米國人特に東北部の米國人に対する呼称。
ケンタッキー Kentucky 米國南中部の一州。

いて谷間やエルクホルンを跋渉し、ルイジアナまたはジョルジアの住民もそうする。
湖・入江、または海沿いに住む舟人も私だ、私はフージャだ、バッジャーだ、バッキーだ。
カナダふうの雪くつにも草むらの中にも手慣れている。あるいは遠くニューファウンドランドの消防夫らとも親しみがある。
滑氷船の群れとも親密で、他のものとともに帆走りまたはかじをとる。
ヴァモントの丘陵の上にあっても、メインの森林の中にあっても家にいると同様だ。
カリフォルニアのなかまだ、自由な西北州人のなかまだ（彼らの肥大な体軀を愛しながら）。
いかだ師と炭坑夫とのなかまであり、握手をかわし飲食に親しむものすべてのなかまだ。
最も単純なもののでし、最も思慮あるものの導師。
手はじめの新発意、しかも幾多の春秋を経来た

ルイジアナ　ジョルジア　ともに米國南部の州の名。
フージャ　Housier　米國インディアナ州人のあだ名。
バッジャー　Badger　米國ウィスコンシン州人のあだ名。
バッキー　Buckeye　米國オハイオ州人のあだ名。
ニューファウンドランド　New Found land　カナダの東部セントローレンス灣にある島。英領。
ヴァモント　Vermont　米國東北部の州の名。

メイン　Maine　米國北東部の一州。
カリフォルニア　California　米國西部の州の名。
クェーカー宗徒　Quaker　キリスト教の一派である教友派の教徒の名。

つた巧者。
すべての人種と階級とに属し、すべての地位と宗教とに属し、
ひとりの百姓であり、器械工であり、藝術家であり、紳士であり、船乗りであり、クェーカー宗徒であり、
囚人であり、ろくでなしであり、法律家であり、医師であり、僧侶である。
私は自分の多趣多様にまさるものに反抗する。
大氣を呼吸するがなお多くを私の後に残す。
しかも私はからいばりをしない、その分を守っている。蛾とさかなの卵とはその分を守っている。（見ることのできる輝く恆星と、見ることのできぬ暗黒な恆星とはその分を守っている。触れうるものもその分を守り、触れえぬものもその分を守っている）。

（「草の葉」有島武郎の訳による）

研究の手引

一、ホイットマンの詩を貫ぬいている精神はどんなものか。

またそれはどこに表われているか。

二、「一」の「あなた」とはだれをさしているのか。

三、「二」の「分を守る」とはどんなことか。

四、「自己をうた」という題で詩を作ってみる。

二　さわらび　（万葉集）

若草の萌え出る時に万葉集をひもとく。

万葉集はわれ〳〵の祖先の心のふるさとであり、國文学の宝庫といわれている。その中の個性のよく表われている作品を読み、万葉集の主流に触れ、それをとおして古代精神の特質をも学習していこう。

万葉集は、奈良時代に成立した歌集で、二十巻より成り、仁徳天皇の時代から淳仁天皇の時代に至る約四百四十年間にわたる作品を收めている。更にその後、幾たびか修正増補されて現在のような歌集となったものであろう。歌の数は、傳本の出入りや、重出歌・本歌などの数え方が人によって違うため、いろ〳〵に数えられているが、「國歌大観」によると四千五百十六首である。

万葉集の作者を調べてみると、あらゆる階層の人が含まれ、地域も近畿地方を中心として、奥羽・関東・中部・九州など、ほとんど全國にわたっている。

こゝに施した番号は「國歌大観」に従った。

雜　歌

1418　志貴皇子のよろこびの御歌一首

いはばしる垂水の上のさわらびの萌えいづる春になりにけるかも

志貴皇子　天智天皇の皇子で、光仁天皇の父。

山部赤人　傳未詳。聖武天皇の時代に仕えた下級の官吏であったらしい。

大伴家持　大伴旅人の子。持節征東將軍となる。

さし絵　わらび。

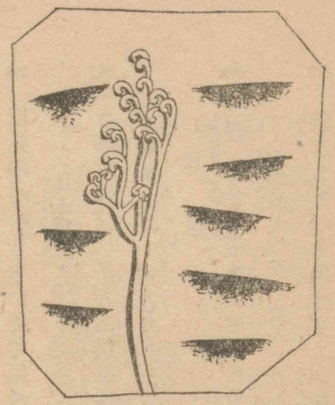
額田王　鏡王の女。

鏡王　鎌足の妻の鏡。女王の妹。天武天皇の妃となる。

大伴坂上郎女　大伴宿奈麻呂の妻。大伴旅人の妹。大伴坂上郎の母。

輕皇子　天武天皇の皇子、草壁皇子の第二王子。後の文武天皇。

柿本人麻呂　傳未詳。歴史にその事



1424　山部宿禰赤人の歌

春の野にすみれつみにと來しわれぞ野をなつかしみひと夜ねにける

天平勝宝二年三月一日の暮（大伴家持）春の園の桃李の花を眺矚して作れる歌

4139　春の園くれなゐにほふももの花した照る道にいで立つをとめ

（天智）天皇、内大臣藤原朝臣に詔して、春山の花のいろ、秋山のもみぢのにほひを競はしめたまふ時、額田王歌をもちてことわれる歌

16　冬ごもり　春さり來れば　鳴かざりし　鳥も來なきぬ　さかざりし　花も咲けれど　山を茂み　入りても取らず　草深み取りても見ず　秋山の　木の葉を見ては　もみぢをば　取りてぞしぬぶ　青きをば　置きてぞ嘆く　そこし恨めし　秋山われは

981　大伴坂上郎女の月の歌

かりたかの高円山を高みかもいで來る月のおそくてるらむ

48　輕皇子の安騎野に宿りませる時、柿本朝臣人麻呂の作れる歌（長歌と反歌三首略）

東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ

中大兄の御歌

15　わたつみの豊旗雲にいり日さしこよひの月夜あきらけくこそ

375　湯原王、吉野にて作れる歌一首

吉野なる夏実の河の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげにして

賢の見えていないのは官位の低い人であったためであろう。
中大兄　中大兄皇子。後の天智天皇。
湯原王　天智天皇の皇子施基親王の御子。
大伴旅人　大納言大伴安麻呂の子。神亀元年太宰帥となる。
反歌　長歌の内容を総括したり、または読みもらしたものを歌つたりする短歌。
山上憶良　遣唐使に從つて中國に行つたことがある。旅人の下官として筑前守となる。

大伴旅人吉野にて作れる歌

316　昔見し象の小河を今見ればいよよさやけくなりにけるかも

（柿本朝臣人麻呂）雲を詠める歌

1088　あしひきの山河の瀬のなるなべに弓月が岳に雲立ち渡る

山部宿禰赤人、富士の山を望める歌一首並びに短歌

317　天地の　わかれし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる　富士の高ねを　天の原　ふりさけ見れば　渡る日の　影もかくろひ　照る月の　光も見えず　白雲も　い行きはばかり　時じくぞ　雪は降りける　語りつぎ　言ひつぎ行かむ　富士の高ねは

反歌

318　田兒の浦ゆうちいでて見ればま白にぞ富士の高ねに雪は降りける

（山上憶良）子どもを思ふ歌一首

802　うり食めば　子ども思ほゆ　くり食めば　ましてしのばゆ　いづくより　來たりしものぞ　まなかひに　もとなかかりて　安寢しなさぬ

反歌

803　銀も金も玉も何せむにまされる宝子にしかめやも

太宰帥大伴卿（旅人）酒を讃むる歌

338　驗なきものを思はずは一坏の濁れる酒を飲むべくあらし

340　いにしへの七の賢しき人どもも欲りせしものは酒にしあるらし

344　あな醜く賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見ればさるにかも似る

短歌　長歌に対して三十一音の歌をいう。
高橋虫麻呂　傳未詳。天平ごろの歌人であったといわれる。
旋頭歌　五七七、五七七の六句体の歌。
相聞　互に唱和し問いかわす歌。恋愛の歌が最も多い。

高橋虫麻呂、勝鹿の眞間娘子を詠める歌一首並びに短歌

1807　鶏が鳴く　あづまの國に　いにしへに　ありけることと　今までに　絶えず言ひ來る　勝鹿の　眞間の手兒奈が　麻衣に　青衿着け　ひたさ麻を　裳には織り著て　髪だにも　掻きは梳らず　くつをだに　穿かず行けども　錦綾の　中につつめる　いはひごも　妹にしかめや　望月の　満てる面わに　花のごと　ゑみて立てれば　夏虫の　火に入るがごと　みなと入りに　船漕ぐごとく　行きかぐれ　人のいふ時　幾ばくも　生けらじものを　何すとか　身をたなしりて　浪の音の　騒ぐみなとの　おくつきに　妹が臥せる　遠き代に　ありけることを　きのふしも　見けむがごとも　おもほゆるかも

反歌

1808　勝鹿の眞間の井を見れば立ちならし水汲ましけむ手兒奈しおもほゆ

天平十年戊寅、元興寺の僧のみづからなげく歌一首（旋頭歌）

1018　白珠は人に知らえず知らずともよし知らずともわれし知れらば知らずともよし

相聞

95　内大臣藤原卿（鎌足）采女安見兒を得たる時、作れる歌

われはもや安見兒得たり皆ひとの得がてにすとふ安見兒得たり

3724　狭野茅上娘子、中臣朝臣宅守と別れに臨みて作れる歌

君が行く道の長路を繰りたたね燒き亡ぼさむ天の火もがも

大伴宿禰家持、閏七月をもつて越中國守に任けられ、すなはち七月を取りて任所におもむく

○詩　歌

時に姑大伴氏坂上郎女、家持に贈れる歌二首

3927 草まくら旅ゆく君をさきくあれと斎瓮すゑつあが床の辺に

3928 今のごと恋しく君が思ほえばいかにかもせむするすべのなさ

挽歌

柿本朝臣人麻呂、妻死せし後、泣血哀慟して作れる歌並びに短歌

挽歌　人の死を悲しみいたむ歌。

207 天とぶや　軽の路は　吾妹子が　里にしあれば　ねもごろに　見まくほしけど　やまず行かば　人目を多み　まねく往かば　人知りぬべみ　さねかづら　のちもあはむと　大船の　思ひたのみて　玉かぎる　磐垣淵の　こもりのみ　恋ひつつあるに　渡る日の　暮れぬるがごと　照る月の　雲隠るごと　おきつ藻の　なびきし妹は　もみぢばの　過ぎていにきと　玉づさの　使の言へば　あづさ弓　おとに聞きて　言はむすべ　せむすべ知らに　おとのみを聞きてありえねば　吾が恋ふる　千重の一重も　慰さむる　情もありやと　吾妹子が　やまずいでみし　軽の市に　あが立ち聞けば　玉だすき　畝火の山に　鳴く鳥の　こゑも聞えず　玉梓の道行く人も　ひとりだに　似てし行かねば　すべをなみ　妹が名よびて　袖ぞふりつる

反歌

141 秋山のもみぢを茂み迷ひぬる妹を求めむ山道しらずも

209 もみぢばの散りぬるなべに玉づさの使を見れば逢ひし日おもほゆ

有間皇子、みづからいたみてまつが枝を結べる歌二首

有間皇子　孝徳天皇の皇子。反逆を企てつひに滅ぼさる。

208 磐代の浜まつが枝をひき結びまさきくあらばまたかへり見む

142 家にあらば筒にもる飯を草まくら旅にしあればしひの葉にもる

天平十一年夏六月、（大伴家持）亡妻を悲傷して（作れる歌）

464 秋さらば見つつしぬべと妹が植ゑしにはの石竹咲きにけるかも

474 昔こそよそにも見しが吾妹子がおくつきと思へばはしき佐保山

東歌

3373 多摩川にさらすたづくりさらさらに何ぞこの児のここだ愛しき

3396 鶏鳥の葛飾早稲を饗すともその愛しきを外に立てめやも

3399 信濃道は今の墾道刈株に足ふみしなむくつはけわが夫

天平勝宝七歳乙未二月、相替はりて筑紫に遣はさえし諸國の防人らの歌

4322 わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘られず

右の一首は主帳丁鹿玉郡若倭部身麻呂

若倭部身麻呂　傳未詳。

4342 眞木柱讃めて造れる殿のごといませ母刀自面変はりせず

右の一首は坂田部首麻呂

坂田部首麻呂　傳未詳。

研究の手引

一、山部赤人・柿本人麻呂の自然に対する感覚を比較する。

二、女流歌人の感情の表出について調べる。

三、高橋虫麻呂の作歌態度について調べる。

四、「東歌」と「防人の歌」の特徴を調べる。

五、こゝにあげた各作家を時代順におきかえて、万葉集中の歌風の変遷を調べる。

六、こゝにあげられた歌の形式の種類を調べる。
七、後世「万葉調」といわれる歌風の特徴を調べる。

評論

前課で万葉の歌を読んで感動したわれ〳〵は、この文によって、その感動を整理することができる。

三　万葉の感動

務台理作

務台理作は、明治二十三年（一八九〇）長野縣で生まれた。哲学者。東京教育大学教授。著書には「ヘーゲル研究」・「表現と論理」・「現象学研究」・「歴史と解釈学」・「場所の論理学」などがある。

一

日本人は元來感情生活の深さにおいて、すぐれた天分を持つ國民であることは、既によく知られたことであって、いまさらいうまでもない。実際日本國民の文化の中で、最も高い價値を持つものは感情の文化であろう。わけても上代人が敘情詩的天分によって、万葉集を作りあげ、今日に残してくれたことは、われ〳〵がどれほど上代人に感謝してもしきれないものがある。万葉こそ上代人のすぐれた感動生活の結晶である。それは永遠に若く明かるく健康に満ちた感情である。それは近代人の感情に比して比較にならないほど正直であり、ひとむきであって、かくしだてがない。上代人は何事につけてもたゞひとむきに深い感情を経驗したのである。この感情の深さと、それをすぐれた敘情詩にまで歌いあげた力とは、全く上代人の不滅の誇りであるというべきであろう。

万葉集は今日においてもわが國最大の敘情詩である。これは永久に変わらない價値づけであろう。万葉はわが國民精神の豊かな源泉であるばかりでなく、また廣く世界の人々に向かってその理解を求めうる世界性をも所有するからである。われ〳〵はいろ〳〵の國民文学を持つが、その中で、ひとりわれ〳〵によくわかるばかりでなく、廣く世界の人々に訴えて共感せしめうるものとしては、万葉はまず第一にあげられるべきものであろう。

万葉人の感動の深さと、多様性（個性のひらめき）と、その純粋性とはいったい何ものに起因しているのであろうか。思うに、それは記紀、特にその歌謡の傳承された歴史的傳説の時代にその源泉をもっている。記紀の歌謡はいうまでもなく、その本文のだいたいの構成より一時代以前にさかのぼる古い時代の調子を保存をしているものであり、歴史的傳説時代の人々の素朴な感動と関連しているものである。そうしてこれらの歌謡を通して知りうることは、その感情が、一見きわめて日常的な身辺に即してきわめてうちわにつゝましやかに表現されておりながら、実際はまことに烈々たるものであるということである。このことは上代人の比類のない正直さ朴訥さを語るものにほかならないであろう。

上代人の感動の表現は、一面において身辺的卽物的であるとともに、他の一面において、激しい意力を藏していた。近代人にとってはあまりに平凡であり、日常的であるところのものについて、上代人は激しい感動を実感した。なぜであろうか。私は上代人は日常の生活そのものに対して、いわば非日常性を感ずる度が、近代人に比してはるかに多かった、また強かったと考えざるを得ない。わが上代人が世界に比類少ない感動的國民として價値づけられるのは、近代人があまりに日常化して感動を

記紀　古事記・日本書紀の略称。

なくしてしまったようなものに対して強い非日常性を――生きた感動の源泉を感じたからである。

いったい感動に関して、たれびとも否定できないところの原理がある。それは既に日常化され習慣化されてしまったものについては、感動を新たにすることは不可能である、という原理である。

いかような感動もそれが日常平凡にくり返されるものとして経験されることになれば、必ずその感動を喪失する。習慣化は安易化である。安易化ほど感動の力を減殺するものはない。日常の安易を求めることは、清新な感動を喪失することである。喜びや悲しみの感動は、いわばその瞬間の機においてその感動を新たにするものである。かゝる今の感動にして、はじめて人はその全身を揺り動かされる。したがって、もし日常的な安易性が感動を減殺するとすれば、感動の起因となるものは、その日常的安易を否定するところの、非日常的なものの意識にあるといわなければならない。すなわち非日常性とは、日常的安易さを否定し、その習慣の痳痺化を否定するものである。深い感動は、このような否定的なものを常にその基底に置いている。しかも非日常的なものは、日常的なものを離れてあるわけでなく、日常的なものの底にあって、その安易性を否定するものでなければならぬ。

それでは、このような日常における非日常的なものとはいったい何ものであるか。いうまでもなくそれは生死の基底をなしているものである。生死の基底とは、もと形なきものであり、したがって無底的深淵的なものである。それにおいて日常性は、いわば無底的に揺り動かされる。それゆえに人は深いパトスを感ずるのである。もし非日常的とか無底的とか深淵とかいうことばが、あまりに実存哲学に偏したものであるというならば、古人のことばにしたがって、生死の境とか生命のきわみとかいってもよいであろう。そこで日常の生死はきわまり盡くし、習慣による痳痺は一拳に無力にされる。

パトス pathos ギリシア語。感動の意。

上代人は「たまきはるいのち」ということばを愛用したが、「たまきはる」とは「たまきはまる」の義であるという。このようにきわまる生命にして、はじめて瞬間瞬間にその存在の全体が揺り動かされるのである。悲しみは瞬間瞬間にその悲しみの瞬間を新たにして、新たな悲しみを生むのであり、喜びは瞬間瞬間にその喜びを新たにして喜びを生む。かゝる場合の瞬間とは、もちろん時間の寸短を示すのでなく、われ〳〵の心が深淵に向かって置かれる位置の意識を示すもの、したがってそれはその内容の単一を示すのでなく、かえって複雑豊富なるものの統一を端的に示すものである。

二

このように上代人の感動を考察することに対して、あるいは上代人が常に現実否定者であり、生々発展の生産的意志に生きたのであって、現実否定すなわち非日常性の意識のごときものは持たなかった。否定性の意識は佛教から教えられたものであって、本來の日本精神にはけっして存在していなかったと、このように反対する人があるかもしれない。上代人がこのような生産的精神の所有者であり、きわめて明朗であり健康であったことについては、もちろんなんら異議はない。しかし現実をたゞ日常性の示すがまゝに肯定し、この現実の安易をのり越える道を持たなかったとすれば、けっして偉大なる感動の時代を所有することなどできなかったであろう。上代人が偉大なる感動の持ち主であったことは、万葉集の存在が何よりもこれを証示しているではないか。したがって上代人は、非日常的なもの深淵的なものに、むしろ近代人よりもより多く直面していたといわなければならない。

その例として、須佐之男命（すさのおのみこと）とか倭建命（やまとたけるのみこと）などの物語に見られる悲劇的精神があげられる。この精神は更に万葉人に傳承せられて、有間皇子・大津皇子のような哀歌となり、一轉して柿本人麻呂の挽（ばん）

歌における調べの高い國民的慟哭の源泉ともなっているものである。これらはけっして樂天的な精神のみをもってしては理解することのできない深淵の意識に触れている。

このような深淵性の所在は何ものに起因するか。第一には、上代人は日常生死の危險にさらされること近代人よりもはるかに多かったといわざるを得ない。病氣や天災地変に対する防禦力もはるかに低かったわけであり、行旅の困難も言語に絶するものがあった。行路病者・貧窮者などもなか〳〵多かった。皇位継承をめぐる変、辺夷外地における諸変、わけても壬申の変の人々に與えた衝動は実に深刻なものがあった。したがって、生死の境に身を置くことの意識は、近代人よりはるかに深かったといわなければならない。上代人は、けっして樂天的な現実肯定者のみではありえなかった。

第二に、ものごとに深く感動することは、この時代の環境に起因するばかりでなく、何よりも上代人の天性に属していた。そのことは、上代人が早くから「われ」の意識にめざめていたことによってよく知られるであろう。社会学者によれば、上代人もまた未開社会人の場合と等しく、共同の「われわれ」の意識が強く、單数一人称の「われ」の意識に到達するのは容易ではなかったといわれる。しかしわが上代人はこの一人称の「われ」の意識を早くから所有していたのである。記紀の歌謡にもはなはだ例が多いが、わけても万葉においては、「われ・わが・あれ・あ・わ」というような單数一人称に関係することばは、総数四千五百余の歌の中に約一千五百回も使用されているのである。これは何よりも感動するわれの量的大きさを示すものである。もちろん、この「われ」は、知性的我の自覚、たとえばデカルトのコギトのごときものを示すものではない。しかしけっして單なる共同の「われ〳〵」の意識にとどまるものでないことも明らかである。これは感動人われの規定を示すものであろう。したがってこのわれは、純粹になればかえって無我のわれに通ずるものである。感動の中で最も純粹なものは愛であり、愛は深まればかえって無我愛のごときものになるといわれるではないか。後に佛教的無我の思想の受け入れられたのも、このような「われ」の意識が既に上代人に用意されていたからである。

コギト cogito（ラテン語）「われ考える。ゆえにわれあり」の思想。

上代人はこのような感動の持ち主であった。それにもかゝわらず、深淵的性格を抽象化して、深淵を深淵として取り出すということをけっしてしなかった。常に日常身辺の卑近なものごとに即して、これをひたすら正直に即物的に取り扱った。由來深淵性とはそれだけのものとして單に観念されるべきものでなく、必ず実践的に克服されるべきものである。この克服の方法が、上代人にとっては、叙情詩的表現の道となったのである。すなわち深淵の克服として叙情詩時代が築かれた。それはもはや須佐之男命における深淵的慟哭の境地にとどまるものでない。あくまで日常身辺のものごとに即する実感的な正直さと、まっすぐに自己の感動を歌いきる自信と、恩愛・親愛・恋愛についての愛の深さ、自然の風物についての温かい親和の情など、すべてこれらの情を叙情詩的に表現することによって、深淵的慟哭をのりきるのである。深淵的激情について、一種のカタルシスを施すことになるでもあろうか。深淵に直面しつゝ、しかも正直な実生活の意識をもってそれを和らげ、それを叙情詩的感動の深さをもって包みつゝのりきるのである。それが万葉的感動の時代である。英雄的傳説の時代においては、その深淵はまだのり越えられずに、古代的異常がそれにまとわっていた。万葉人は叙情詩によってこれをついにのり越えたのである。

カタルシス katharsis 浄化作用。

（「場所の論理学」による）

研究の手引

一、万葉の感動の特色を箇條書にしてみる。

二、「さわらび」の課に出ている歌を読み返し、この文の論旨と照らしあわせて、実例として適当なものを選んでみる。

三、万葉集の持つ世界的性格について討論する。

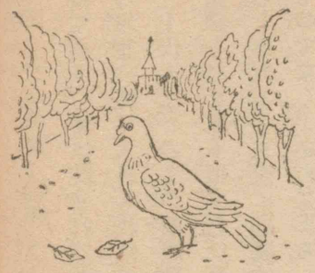
小品

東西ふたりの作家の小品をこゝに收めた。スタイルの違う小品の味わいを読みとろう。

四田園風物

ルナール

ルナール（Jules Renard）は、一八六四年フランスのシャロンで生まれ、一九一〇年に沒した。小説家。劇作家。著書には、小説に「にんじん」・「博物誌」・「牧歌」など、戯曲に「別れも樂し」・「日々のパン」などがある。



ふとった子どもとやせた子ども

公園の同じ並木道、はととつぐみが親しげに入り乱れている。その中に、ふたりの婦人がとなりあって腰をおろしていた。お互に知らないどうしであった。が、ふたりとも、ひとりの子どもを連れていた。ばら色の着物を着た婦人は、ふとった子どもを、黒い着物を着た婦人はやせた子どもを連れている。

初めのうち、彼女らは、口をきかないで、互に顔を見あわせていた。そのうちに、それとなく双方から軽く話をもちかけた。

「坊や、赤ちゃんにぶつかるよ。」

「坊や、赤ちゃんに砂すくいを貸しておあげ、おにいさんみたいに。」

とつぜん、黒衣の婦人は、堪えかねて、ばら色の婦人に声をかけた。

「まあ、おりっぱな赤ちゃんですこと、奥様。」

「ありがとうございます。奥様。皆さんがよくそうおっしゃってくださいますんですよ。いくらそうおっしゃられても、こればかりは聞き飽きませんの。でも、母親の目で見ますと、自分の子ですもの、どうしてもひいき目っていうものがございましてね。」

「そんな、あなた、いくらご自慢なすったってようございますね。きれいでまぶしいようですもの、見ているだけでもいい心持になりますわ。あのしっかりしまった肉づき、生で食べてもようございますわね。どうでしょう、えくぼがいっぱい、どこにもかしこにも、おてて、あんよ、恐ろしいようですわ。百年はだいじょうぶですわね。まあ、あのかん〳〵のふさ〳〵して軽そうですこと。失礼ですけれど、なんじゃございませんか、やっぱりこてをおかけになるんでしょうね。そうでしょうね、奥様。」

「いゝえ、奥様。そんな、私、子どもの頭にかけて誓いますわ。そんなもったいない、けがらわしい、こてなんか、髪の毛に対して申しわけがあるものですか。生まれた時から、あれなんでございますよ。」

「そうでしょうとも、奥様。ほんとにね、おしあわせですわね、おかあさまが。心の底からおうらやましくぞんじますわ。」

ふたりの婦人は互に近づいていった。そして、やせた子どもが、かろうじていきをしながら、地上に投げ出されている間、黒衣の婦人はふとった子どもを抱き上げて、重さを測ったり、あやしたり、ながめいったり、そして、目を見張って「まあ、なんて重いんでしょう。ほんとに、なんてまあ重いんでしょう。」とくり返していた。「ほめていたじいて喜んでますわ。」――ばら色の婦人は言った。「でも、あなたの赤ちゃんはおとなしくっていらっしゃるようですわね。」

黒衣の婦人は、がっかりして、寂しく笑った。自分がこうまでいっしょうけんめいになっているのに、その報酬なら、もっとなんとかしたあいさつが聞きたかった。まじめな平凡なおあいそより、氣のきいた空おせじの方がましだとさえ思った。もうあきらめてはいるものの、彼女は、また何かを乞い求めるように見えた。

ばら色の婦人は、それと見て取った。機轉のきかなかったことが恥ずかしく、それに心底の優しい彼女は、やせた子どもをひざの上に抱き取り、くちびるの先を押し当て、もったいらしくこう言った。「奥様、こんなこと、あなたがおかあさまだから申すんじゃございませんよ。でも、私、あなたの赤ちゃんも、たいへんおりっぱだと思いますわ、こういうふうなたちの赤ちゃんとしてはね。」

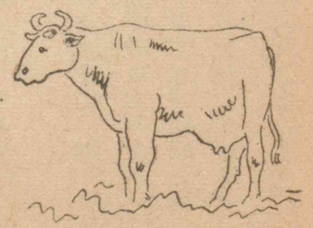
牝牛

これがいい、あれがいいと、とう〳〵さがしあぐんで、彼女には名まえをつけないでしまった。彼女はたゞ、「牝牛」とよばれる。そして、それがいちばん彼女にふさわしい名まえであった。

それに、そんなことはどうでもいい、彼女は食うだけのものは食うのだから――青草でござれ、乾草でござれ、野菜でござれ、穀物でござれ、パンや塩にいたるまで、なんでもほしいだけ食った。なんに限らず、いつでも彼女は二度ずつ食った。吐き出してまた食うのだから。

彼女がわたしを見つけると、軽い細やかな足どりで、割れた木ぐつをひっかけ、膚の皮を、白くつしたのように足の辺に張りきらせて走って來るのである。彼女は、わたしが何か食いものをくれると思いこんでやって來るのである。彼女の姿を見ていると、わたしは、そのたびごとに「さ、おあがり」と言わないではおられない。

しかし、彼女が飲みこむものは、脂肪にはならないで、みんな乳になる。一定の時刻に、乳房がいっぱいになり、眞四角になる。彼女は乳を長くためておくということができない――長くためておく牝牛もあるが――ゴムのような四つの乳首から、ちょっと押さえただけで、氣まえよくありったけの乳を出してしまう。彼女は足も動かさなければ、しっぽも振らない。が、その大きな柔らかな舌で、乳をしぼる女の背中をなめて遊んでいる。



ひとり暮らしであるにもかゝわらず、盛んな食欲が彼女のたいくつを忘れさせる。最近に産み落した子牛のことをぼんやり思い出して、わが子恋いしさに鳴くようなこともまれである。たゞ、彼女は人の訪問を喜ぶ。額の上ににゅっとはえた角と、一筋のよだれと一本の草とをたらしたあまったれた口とで、あいそよく迎えるのである。

こわいものなしという男たちは、そのはちきれそうな腹をなでる。と、女たちは、こんな大きな獣

がこんなにおとなしいのを見て意外に思う。

ありとみそさざい

一匹のありが、雨あがりのわだちの中に落ち込んで、おぼれようとしていた。そのとき、一わのみそさざいが、ちょうど水を飲んでいた。それを見ると、くちばしで拾い上げ、命を助けた。

「この御恩はきっと返します。」と、ありが言った。

「わたしたちは、もうラ＝フォンテーヌの時代にいるのではありません。」と、懐疑主義者のみそさざいが言う。「もちろんあなたが恩知らずだというのではありません。が、わたしを撃ち殺そうとしている猟師のかゝとに、あなたはどうして食いつくことができます。今時の猟師は素足で歩きませんよ。」

ラ＝フォンテーヌ Jean de La Fontaine（一六二一―一六九五）フランスの諷刺作家。

ありは、よけいな議論はしなかった。そして、急いで、なかまの群れに加わった。なかまは、一列に並べた黒い眞珠のように、同じ道をぞろ〳〵と歩いていた。

ところが、猟師は遠くにいなかった。一本の木の陰に横向きになって寝ていた。彼は、件のみそさざいが刈りたてのまぐさの間で、ちょこちょこ、餌を拾っているのを見つけた。彼は立ち上がって、撃とうとした。すると、右の腕がしびれて（ありが這っているように）むず〳〵する。鉄砲を構えることができない。腕が、ぐったりたれる。みそさざいは猟師のしびれがなおるのを待っていない。

ぞう

それは、若いダニエルがぞうの見まわりをする時刻である。

いつもの見物が彼を待っていた――労働者・兵卒・娘・放浪者。それから外國人。

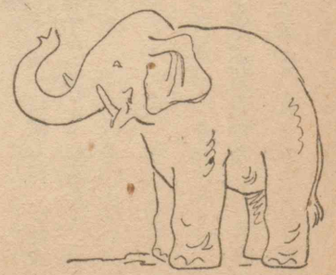
「さ、ちん〳〵だ。」――ダニエルは、指をあげて言う。ぞうは、一度ではうまくゆかなかった。重苦しいからだを、やっと起したかと思うと、前に倒れる。そして鼻を鳴らす。

「もっとじょうずに。」――ダニエルはつっけんどんに言う。すると、ぞうは、檻よりも高く立ち上がる。そしておそろしく、どえらい、太古時代そのまゝの姿で、彼は一声うなりを発する。あたりの空氣は水晶のようにひゞがはいる。

「そうだ。」――ダニエルが言う。

ぞうはもう四本の足で立ってもいいのである。鼻をまっすぐに上げて、口をあけていいのである。ダニエルは、その中に、遠くからパンのかけらを投げ入れる。ねらいがうまいと、パンのへたが、黒いたゞれた口の奥で音をたてる。次に、てのひらへ載せて、一つ〳〵野菜のきれくずを與える。ざらざらした、しかし鋭敏なその鼻がさくの間を行ったり來たりする。そして、ちょうど、ぞうが、その中で息を吐いたり吸ったりしているように、曲がったり伸びたりする。

糸で引っ張ってあるような薄い耳が、満足げにひるがえる。しかし、小さな目はあい変わらずどんよりしている。最後にダニエルは、紙で包んだうまいものを口の中へ投げ込む。その紙包みは、納屋の抜け穴をねこが通るようにはいって行く。



ぞうはたったひとりになると、家のるすばんをしている村の老いぼれたじゝいのようなものである。彼は戸の前で、からだを曲げ、ぼんやり鼻をぶらさげて、靴をひきずっている。上の方へはさすぎたもゝひきの中にほとんどからだが隠れ、そして、後から、ひものはしがだらりとたれている。

（「葡萄畑の葡萄作り」岸田國士の訳による）

研究の手引

一、「ふとった子どもとやせた子ども」の筋を書いてみる。

二、「牝牛」・「ぞう」の軽妙な表現を拾いあげる。

三、「ありとみそさざい」の寓意について話しあう。

四、ルナールの文のスタイルについて感想を書いてみる。

五　永日小品

夏目漱石

夏目漱石、本名は金之助。慶應三年（一八六七）東京で生まれ、大正五年（一九一六）に沒した。小説家。著書には、「わがはいはねこである」・「坊ちゃん」・「草枕」・「虞美人草」・「明暗」などがあり、全作品は「夏目漱石全集」に收められてある。

ねこ

早稲田へ移ってから、ねこがだん〳〵やせてきた。いっこうに子どもと遊ぶ氣色がない。日が当たると縁側に寢ている。前足をそろえた上に、四角なあごを載せて、じっと庭のうえこみをながめたまま、いつまでも動くようすが見えない。子どもがいくらそのそばで騒いでも、知らぬ顔をしている。

子どもの方でも、初めから相手にしなかった。このねこはとても遊びなかまにできないといわんばかりに、旧友を他人扱いにしている。子どものみではない、女中はたゞ三度の食を、台所のすみに置いてやるだけでそのほかには、ほとんどかまいつけなかった。しかもその食は、たいてい近所にいる大きなみけねこが來て食ってしまった。ねこはべつに怒るようすもなかった。けんかをするところを見たためしもない。たゞ、じっとして寢ていた。しかしその寢方にどことなく余裕がない。のんびり樂々と身を横に、日光を領しているのと違って、動くべきせきがないために——これでは、まだ形容し足りない。懶さの度を、あるところまで通り越して、動かなければ寂しいが、動くとなお寂しいので、がまんして、じっとしんぼうしているように見えた。その目つきは、いつでも庭のうえこみを見ているが、彼はおそらく木の葉も、幹の形も意識していなかったのだろう。青味がかった黄色いひとみを、ぼんやり一所に落ち着けているのみである。彼が家の子どもから存在を認められぬように、自分でも、世の中の存在を判然と認めていなかったらしい。

それでもとき〳〵は用があるとみえて、外へ出て行くことがある。するといつでも近所のみけねこから追い駆けられる。そうして、こわいものだから、縁側を飛び上がって、立てきってある障子を突き破って、いろりのそばまで逃げ込んで來る。家の者が、彼の存在に氣がつくのはこの時だけである。彼もこの時に限って、自分が生きている事実を、満足に自覚するのだろう。

これがたび重なるにつれて、ねこの長いしっぽの毛がだん〳〵抜けてきた。初めはところどころがぼく〳〵穴のように落ちこんで見えたが、後には赤膚に抜けひろがって、見るも氣の毒なほどにだら

りとたれていた。彼は万事に疲れ果てた体軀をおし曲げて、しきりに痛い部分をなめだした。

「おい、ねこがどうかしたようだな。」と言うと、「そうですね。やっぱり年をとったせいでしょう。」と、妻はしごく冷淡である。自分もそのまゝにしてほおっておいた。すると、しばらくしてから、今度は三度のものをときゝ吐くようになった。のどの所に大きな波を打たして、くしゃみとも、しゃくりともつかない苦しそうな音をさせる。苦しそうだけれども、やむをえないから、氣がつくと表へ追い出す。でなければ疊の上でも、ふとんの上でも、容赦なくよごす。來客の用意にこしらえた八反の座ぶとんは、おゝかた彼のためによごされてしまった。

「どうもしょうがないな。胃腸が悪いんだろう。宝丹でも水に溶いて飲ましてやれ。」

妻はなんとも言わなかった。二、三日してから、

「宝丹を飲ましたか。」と聞いたら、

「飲ましてもだめです、口をあきません。」という答をしたあとで、

「さかなの骨を食べさせると吐くんです。」と説明するから、

「ぢゃ、食わせんがいいじゃないか。」と、少しけんどんにしかりながら書見をしていた。

ねこは吐き氣がなくなりさえすれば、いぜんとして、おとなしく寢ている。このごろでは、じっと身をすくめるようにして、自分の身をさゝえる縁側だけがたよりであるというふうに、いかにもきりつめたうずくまり方をする。目つきも少し変わってきた。初めは近い視線に、遠くのものが映るごとく、悄然たるうちに、どこか落ち着きがあったが、それが、しだいに怪しく動いてきた。けれども目の色はだんゝ沈んでゆく。日が落ちてかすかないなずまが現われるような氣がした。けれどもほう

っておいた。妻も氣にもかけなかったらしい。子どもは無論ねこのいることさえ忘れている。

ある晩、彼は子どもの寢る夜具のすそに腹ばいになっていたが、やがて、自分の取ったさかなを取り上げられる時に出すようなうなり声をあげた。この時変だなと氣がついたのは自分だけである。子どもはよく寢ている。妻は針仕事に余念がなかった。しばらくすると、ねこがまたうなった。妻はようやく針の手をやめた。自分は、「どうしたんだ。夜中に子どもの頭でもかじられちゃたいへんだ。」と、言った。「まさか。」と妻はまた、じゅばんのそでを縫いだした。ねこはおりゝうなっていた。

あくる日はいろりの縁に乘ったなり、一日うなっていた。茶をついだり、やかんを取ったりするのが氣味が悪いようであった。が、夜になるとねこのことは自分も妻もまるで忘れてしまった。ねこの死んだのは実にその晩である。朝になって、女中が裏の物置にたきぎを出しに行った時は、もう堅くなって、古いかまどの上に倒れていた。

妻はわざゝそのようすを見に行った。それから今までの冷淡にひきかえて急に騒ぎだした。出入りの車夫を頼んで、四角な墓標を買って來て、「何か書いてやってください。」と言う。自分は表にねこの墓と書いて、裏に「この下にいなづま起る宵あらん」としたゝめた。車夫は「このまゝ、埋めてもいいんですか。」と聞いている。「まさか火葬にもできないじゃありませんか。」と女中がひやかした。

子どもも急にねこをかわいがりだした。墓標の左右にガラスのびんを二ついけて、はぎの花をたくさん挿した。ちゃわんに水をくんで、墓の前に置いた。花も水も毎日取り替えられた。三日めの夕方に四つになる女の子が——自分はこの時書斎の窓から見ていた——たったひとり墓の前へ來て、しば

らく白木の棒を見ていたが、やがて手に持った、おもちゃのしゃくしをおろして、ねこに供えたちゃわんの水をしゃくって飲んだ。それも一度ではない。はぎの花の落ちこぼれた水のしたゝりは、静かな夕暮れの中に、幾度か愛子の小さいのどを潤した。

ねこの命日には、妻がきっと一切れのさけと、かつおぶしをかけた一杯の飯を墓の前に供える。今でも忘れたことがない。たゞこのごろでは、庭まで持って出ずに、たいていは茶の間のたんすの上に載せて置くようである。

かき

喜いちゃんという子がいる。なめらかな皮膚と、あざやかなひとみを持っているが、ほおの色は発育のいい世間の子どものようにさえ〳〵していない。ちょっと見ると一面に黄色い心持がする。おかあさんがあまりかわいがりすぎて表へ遊びに出さないせいだと、出入りの女髪結いが評したことがある。おかあさんは東髪のはやる今の世に、昔ふうのまげを四日めに四日きっと結う女で、自分の子を喜いちゃん喜いちゃんと、いっでも、ちゃんづけにして呼んでいる。このおかあさんの上に、また切り下げのおばあさんがいて、そのおばあさんがまた喜いちゃん喜いちゃんと呼んでいる。「喜いちゃん、お琴のおけいこに行く時間ですよ。」「喜いちゃん、むやみに表へ出て、そこいらの子どもと遊んではいけません。」などと言っている。

喜いちゃんは、これがためにめったに表へ出て遊んだことがない。もっとも近所はあまり上等でない。前に塩せんべい屋がある。その隣に瓦師がある。少し先へ行くとげたの歯入れ屋と、いかけじょうまえ直しがいる。ところが喜いちゃんの家は銀行のお役人である。へいの中にまつが植えてある。冬になると植木屋が来て狭い庭に枯れまつ葉をいちめんに敷いて行く。

喜いちゃんは仕方がないから、学校から帰って、たいくつになると、裏へ出て遊んでいる。裏はおかあさんや、おばあさんが張りものをする所である。よしが洗濯をする所である。暮れになると、むこうはちまきの男がうすをかついで来て、もちをつく所である。それから漬け菜に塩をふってたるへ詰め込む所である。

喜いちゃんはこゝへ出て、おかあさんやおばあさんや、よしを相手にして遊んでいる。時には相手のいないのに、たったひとりで出て来ることがある。その時は浅い生垣の間から、よく裏の長屋をのぞきこむ。

長屋は五、六軒ある。生垣の下が三、四尺がけになっているのだから喜いちゃんがのぞきこむと、ちょうど上からつごうよく見おろすようにできている。喜いちゃんは子ども心に、こうして裏の長屋を見おろすのが愉快なのである。辰さんがはだを脱いで酒を飲んでいると、「お酒を飲んでてよ。」とおかあさんに話す。大工の源坊が手おのをといでいると、「何かといでてよ。」とおばあさんに知らせる。そのほか「けんかをしててよ。」「焼きいもを食べててよ。」などと、見おろしたとおりを報告する。すると、よしが大きな声を出して笑う。おかあさんもおばあさんも、おもしろそうに笑う。喜いちゃんはこうして笑ってもらうのがいちばん得意なのである。

喜いちゃんが裏をのぞいていると、とき〳〵源坊のせがれの與吉と顔を合わすことがある。そうして、三度に一度ぐらいは話をする。けれども喜いちゃんと與吉だから、話のあうわけがない。いつでもけんかになってしまう。與吉が「なんだ、あおんぶくれ。」と下から言うと、喜いちゃんは上から、「やあい鼻たらし小僧。」とさげすむように丸いあごをしゃくってみる。一ぺんは與吉がおこって下からものほしざおを突き出したので、喜いちゃんは驚いて家へ逃げ込んでしまった。その次には、喜いちゃんが、毛糸できれいにかゞったゴムまりをがけ下へ落したのを、與吉が拾ってなか〳〵渡さなかった。「お返しよ。ほうっておくれよ、よう。」と精いっぱいにせっついたが、與吉はまりを持ったまま、上を見ていばってつっ立っている。「あやまれ、あやまったら返してやる。」と言う、喜いちゃんは、「だれがあやまるものか、どろぼう。」と言ったまゝ、裁縫をしているおかあさんのそばへ來て泣きだした。おかあさんはむきになって、表向きよしを取りにやると、與吉のおふくろが「どうもお氣の毒さま。」と言ったきりで、まりはとう〳〵喜いちゃんの手に返らなかった。

それから三日たって、喜いちゃんは大きな赤いかきを一つ持ってまた裏へ出た。すると與吉が例のとおり、がけ下へ寄って來た。喜いちゃんは生垣の間から赤いかきを出して、「これあげようか。」と言った。與吉は下からかきをにらめながら、「なんだい、なんだい、そんなものいらないや。」と、じっと動かずにいる。「いらないの、いらなきゃ、およしなさい。」と、喜いちゃんは、垣根から手を引っ込めた。すると與吉は、やっぱり「なんだい、なんだい、なぐるぞ。」と言いながらなおとがけの下へ寄って來た。「じゃほしいの。」と喜いちゃんはまたかきを出した。「ほしいもんかい、そんなもの。」と與吉は大きな目をして、見上げている。

こんな問答を四、五遍くり返したあとで、喜いちゃんは、「じゃあげよう。」と言いながら、手に持ったかきをぱたりとがけの下に落した。與吉はあわてて泥の着いたかきを拾った。そうして、拾うやいなや、がぶりと横に食いついた。

その時與吉の鼻の穴が震えるように動いた。厚いくちびるが右の方にゆがんだ。そうして食いかいたかきの一片をぺっと吐いた。そうしてけんめいの憎悪を目の裏にこめて、「澁いや、こんなもの。」と言いながら、手に持ったかきを、喜いちゃんにぼうりつけた。かきは喜いちゃんの頭を通り越して裏の物置に当たった。喜いちゃんは、「やあい、くいしんぼう。」と言いながら、駆けだして家へはいった。

しばらくすると喜いちゃんの家で大きな笑い声が聞えた。

（「漱石全集」（第十三卷による）

研究の手引

一、「ねこ」に表われている作者の心がどんなものであるか。また、それがどこにどのように表われているかを考える。

二、「かき」に登場するふたりの子どもの性格と環境とについて批評しあう。

言語觀

六　國語の特質

時枝誠記

外國語と比べて國語はどんな特質を持っているか。この問について、この文は世界的な言語学者の学説を批判しながら、はっきりと説いている。

時枝誠記は、明治三十三年（一九〇〇）東京で生まれた。國語学者。東京大学教授。著書に「國語学史」・「國語学原論」がある。

印欧語　インド・ヨーロッパ語の略。

國語の特質ということを考える場合、從來一般に次のような考え方が行われてきた。それは西洋の言語（主として印欧語）から帰納された理論や体系を基準にして、國語に存して彼にないような現象、彼に存して國語にないような現象を摘出することによって、國語の特質を理解しようとする態度である。ちょうど菱形と正方形とを重ねあわせて、その出入りを検することによって、それ〳〵の特質を見ようとするようなものである。このようにして、國語のアクセントは、近代印欧語の強弱アクセントに対して高低アクセントの特質を持つといわれ、あるいは前者が文において主語を欠くことができないのに対して、後者がしば〳〵これを省略するというふうにいわれてきたのである。以上のような見方によっても、いちおうは國語の特異性というものが理解せられることは事実であるが、このような態度においては、やゝもすれば比較の対象が皮相な現象にのみ限られて、國語の眞相に徹することのできないきらいがある。それは、國語の特質を計量する基準になる印欧語が、必ずしも言語の標準形態を示しているということができないからである。それは物理学上万國共通に認定されたメートル法が物質の計量の基準になるのとは同一に考えることはできない。印欧語もまた言語の一つの特殊狀態であるにすぎないということを、忘れてはならないのである。特殊なものと特殊なものとは、たゞそれのみを比較することは無意味であって、これが比較の可能なためには、両者を媒介する普遍的なものが必要である。さるとさかなとは、動物という普遍的な概念に基づいて、はじめて比較が可能なのであって、さるを基準にしてさかなを観察することは意味をなさない。かつまた基準とせられるものが異なれば、さかなの特質もまた異なってくるのであって、國語の特質も、もしこれを中華語あるいはマレー語などと比較するならば、おのずから異なった結論に到達するのは明らかである。さるとさかなとの特質はこれを動物としての本質に徹することによって明らかになるのであって、動物としての本質は、さるにおいてもさかなにおいても等しく存することなのである。このようにして、國語の特質の観察は、他のなんらかの特殊言語を基準にして、それを尺度として國語との出入りを検することではなくして、根本的には、國語の根底をなす言語の本質に徹することによって、國語がこの本質をいかに顯現しているかという点を明らかにすることによって、國語の特質を把握すべきである。したがって國語の特質の研究は、國語の科学的研究を掘りさげること以外のものでないことを知るのである。そこでまず國語を通じて、言語の本質がいかなるものであるかを最初に明らかにしようと思う。

言語の本質がいかなるものであるかは、從來学者によっていろ〳〵に述べられたことであるが、その代表的なものとして、フェルジナン＝ド＝ソシュールの学説についてみるならば、「言語にはまず概念と聽覚映像との結合によって構成された單位的なものが存在し、これをラング（langue）とゝゝ、一方このラングを運用する働きをランガージュ（langage）とゝゝ、言語研究は、このラングとランガージュを対象とするところに成立する。そして言語研究は、主としてラングとその結合の法則とを研究するもの」としたのである。もし右のような言語本質観に立つならば、各言語の特質は、ラングの構成要素である概念と聽覚映像との特異性と、ラングの結合様式の特異性とに依存しなければならないのである。ソシュールの言語観は、いわばヨーロッパ的言語構成観の一つの展開であって、明治

フェルジナン＝ド＝ソシュール　Ferdinand de Saussure（一八五七―一九一三）スイスの言語学者。ジュネーブで生まれた。

以後ヨーロッパの学説に依拠することの多かったわが國語学界は、おゝむね右のような観点に立って國語を観察し、また國語の特質を理解しようとしてきた。右のごとき構成的言語観に対して、私は言語を、言語主体が素材的事物、あるいは素材的観念を外部に表白する過程とみるところの言語過程観を採るものである。私は右の過程観に立っていかに國語を観察し、またその特異性を理解すべきであるかを述べよう。

言語過程観は、言語が言語として存在するための存在形式を主体的表現過程とみる言語観であって、言語を、概念と音声との結合体としてではなくして、表現素材である事物あるいは観念を、概念化し、更にこれを音声によって表白する主体的表現行爲の一形式と観ずるのである。いっさいの言語はかゝる言語的本質をそれ〴〵特殊なる相において顯現しているとみることができる。この言語過程観の当然の帰結として、言語に対する主体的立場――すなわち実際に言語的表現をなす主体の立場――と、かゝる主体的所産としての言語を、客観的に観察する観察的立場とが区別せられ、更に進んで右のごとき主体的言語表現が成立するためには、主体（話し手）と、場面（話し手の相手である聞き手）と、素材（表現せられる事物あるいは観念）との三者の存在條件が必要である。これを簡單にいえば言語的表現行爲が成立するためには、事物について語る主体である話し手と、たれに向かって語るか、語る相手である聞き手と、それについて語るところの素材的事物とが存在せずしては、言語は存在しえないということである。話し手なくして、しかも言語が存在すると考えるのは、具体的言語を抽象し遊離させた考え方であるにすぎない。言語の本質が心的過程であり、かゝる過程的構造を持った言語が存在するためには、主体・場面・素材の三者の存在條件が不可欠であるとはいっても、これら相互の連関そのものは、言語によってそれ〴〵相違し、一様にこれを律することはできない。そこにまた言語の特質が表われるわけである。

まず國語の統一的思想の表現はいかなる形式において表現されるかを見る。西洋語においては、思想の統一は繋辞（copula）によって表わされ、それは繋辞によってつながれる主語を賓語との中間に位し、物と物とを天秤で結合したような形によって統一されるのである。形式論理学はこれを、A is Bあるいは A—Bによって表わしている。西洋文法の知識が輸入された当初においては、國語における統一表現も、西洋語と同様に、主格と賓格との中間にあるもののように考え、

甲は乙だ。

における「は」を繋辞に相当するものと考えた。しかしながら、文意の理解から考えるならば、國語における統一は、むしろ「だ」にあると考えなくてはならない。したがって「だ」は、西洋語のように主格と賓格とをつなぐ形式において統一を表現しているのではなくして、主語・賓語をくるめる形において統一を表現している。繋辞による統一表現を天秤型と名づけるならば、國語におけるそれはふろしき型と名づけることができるであろう。あたかもふろしきが物をその中に包攝するような統一の仕方である。私はこの関係を次のごとく表わしている。

甲は乙だ　あるいは　甲は乙だ

統一ということを、常に二物の連結として考えていた目からみれば、右のごとき統一形式はあるいははなはだ奇異に感ぜられるかもしれないのであるが、國語における統一形式を、その具体的経験よ

り求めるならば、右のごとく解するほかに方法はないと思う。西洋語における思想の統一表現が、主語・賓語の連結にあるがゆえに、西洋語においては、主語は、文において常に不可欠のものとされたが、包攝形式を採る國語においては、主語は必ずしも不可欠のものではない。あたかも二冊の書籍をふろしきに包んだ場合に統一が成立するならば、一冊の書籍のみを包んだ場合にも同様に統一が成立すると考えられるに等しい。これは國語の主語を考える場合に重要なこととなるのである。

繫辭による統一表現の形式は、繫辭が賓語に融合されて述語によって表現される場合にも適用されることで、he runs は、

he is in the state of running, he-in the state of running

のごとき形において理解されるように、零記号の繫辭は、やはり主語と述語の中間に位するものとして考えるのがふつうである。國語においては、前述の基本構造から推していくならば、これを統一するくるめることばは、

甲は走る □　あるいは　甲は走る □

のごとく、述語のほかに零記号の形において存在するとみるのが至当である。繫辭は表現の素材に対する主体の判断の陳述であって、素材が客体界を表現するに対して、後者は主体そのものの表現というべきであって、この主体・客体両者の合体によって、全き思想、すなわち文の表現が完成されるのである。國語において右の主体の表現に属する語——國語においては古くよりこれを「てにをは」と称してきた——前例の「だ」および零記号の表現以外に、否定・疑問・推量・感動等を数えることができるのであるが、これらはすべて文の最後にきて、全体を総括するのである。

甲は走らず。　甲は走るか。　甲は走らん。　甲は走るよ。

文意のうえからいっても、右の主体に属する否定以下のものは、單に「走る」という語のみにかゝわるのでなく、客体的事実である「甲は走る」ということ全体に対する主体の否定を表現したものであり、疑問・推量を表現したものである。

右のごとき統一表現の形式ならびに客体との関係は、更に細部にまで規律正しく行われているのであって、完結した文を構成するにいたらないような句においても同様である。

國語の現在および將來を決定するものは、半ば過去における國語の歴史的事実である。明治以後、西洋言語学が輸入されて、國語の歴史的研究が盛んになってきたが、そのおもなる目標は、國語自身の自律的展開のあとをたどることであった。國語系統論も同様に、國語の先史時代を究明することであって、あるいはこれをウラル・アルタイ系に求め、あるいはこれをマレオポリネシア系に求めたのである。しかしながら、國語の歴史時代を特色づける最も重要な事実は、右のごとき國語の自律的展開ではなくして、むしろやまとことばということを國語の局部的な概念にまで追いやってしまった中華語の流入に基づく國語の変遷であることは、たれしも氣のつくことである。その点アリアン祖語より分派し、まったく近親関係によって成立した印欧語史とは事情を異にしたものであるということができる。西洋語においては、ゲルマン系統の言語と、ラテン系統の言語が、相互に交流しても、それは同系統の言語の中に生じた現象として、言語の混淆としてとりたてていうべきほど重要な事実ではなかった。西洋の言語史学がもっぱら一言語の展開をたどって、そこに系譜を作ることに主力が注が

ウラル・アルタイ系語　北部アジアからヨーロッパの一部にわたる言語。

マレオポリネシア系語　マレー・ポリネシア両族の言語。西はマダガスカルからマレー半島を過ぎ東はハワイに至る地域の言語。

アリアン語 aryan language　アリアン人種の使う言語。例英独佛露印など。

ゲルマン語 German language　アリアン民族の一支族の語。すなわちドイツ語はその代表である。

ラテン語 Latin language　ラテン系統の語。すなわちスペイン・ポルトガル・フランスル語などはこれに属する。

れたこともっともなことである。しかるに國語における中華語の流入は、まったく意味を異にしているといわなければならない。國語と中華語とは、けっして方言関係には立ちえない。まったく系統の異なった言語である。國語と韓國語との間には一脈の近親関係が存在するとしても、この事実は、有史以來の國語の歴史的事実としては、中華語の流入に比してまったく問題にならない。そうしてこの中華語の流入ということは、現在の國語の運命を決定したものであって、國語の歴史的研究は、まさにこの点に重点がおかれなければならないのである。國語の歴史は、いわば中華語のごとき異種言語の流入によって、これをいかに國語に調和さすべきかの努力の歴史である。今日見るところの國語の混乱・複雑ということは、その大部分は中華語の混入に基づくものであるといえるのであるが、これをたゞ混乱とのみ言いきり、またそう考えてしまうのは、一つには國語における右の歴史的事実に考え及ばないからである。一見紛乱とみせる事実でも、その原理を知ってみれば、案外そこに秩序を見いだすことができるのである。これは國語学の將來の問題であって、このような方面に対する考察が從來欠けていたように思われるのである。これをたとえれば、今日われ〳〵の衣服生活ははなはだしく混乱して、洋式あり、和式あり、しかもそれが二重三重に複雑になっているかにみえるが、それはただわけもなく混乱紛糾しているのではなく、皆それ〳〵の生活に從って、ある場合には和服を、ある場合には背廣を、またモーニング、はおりはかまをというふうに一定の秩序が存するのである。この秩序をこのまゝに放置してよいかということは別問題であって、混乱の中に、なおこれを支配する秩序を見いだすことは難くないのである。これらの混乱は、國語を單に純粋やまとことばのうえについてのみ整理していたのでは解決しえられないことであって、現代の國語の狀態をいちおうそのまゝに肯定し、これを、そのありのまゝの姿において体系づけることが試みられなければならないのである。そうしてその根底において、まず明らかに認識しておかなければならないことは、既に述べてきたところの國語の歴史に表われた重要な事実としての、中華語的要素の混入ということである。

（「國語文化講座」第二卷による）

研究の手引

一、言語の見方として、構成的言語観と言語過程観との相違を調べてみる。
二、國語と英語とが文法上からみて、どんな違いがあるかを説明してみよう。
三、わが國に漢字が渡來して國語にどんな変化を與えたかを話しあってみよう。
四、「國語の研究はどうあるべきか」という題で文を書いてみよう。

藝術と生活

藝術と人間生活との間にどんな関係があるものかという問題を中心にして、二編の文をこゝに收めた。

七　ミケランジェロ

木村素衛

偉大な藝術家には大きな苦悩がある。この文はラファエル・レオナルドとならんだ天才ミケランジェロの苦悩の姿を描いたものである。

木村素衛は、明治二十八年（一八九五）石川縣で生まれ、昭和二十一年（一九四六）に沒した。哲学者。文学博士。京都大学教授。著書には、「ドイツ観念論の研究」・「表現愛」などがある。

ミケランジェロ Buonarroti Michelangelo（西暦一五六四）イタリアの彫刻家。画家。詩人。文藝復興期の代表的藝術家。

ラファエル Raffaello Sanzio（一四八三―一五二〇）イタリア文藝復興期の画家。
ゴビノウ Comte de Gobineau（一八一六―一八八二）フランスの文学者。外交官。
レオナルド Leonardo da Vinci（一四五二―一五一九）イタリア文藝復興期の画家。建築家。
チシアン Tiziano Vecellio（一四八七―一五七六）イタリアの画家。
アンドレア＝デル＝サルト Andrea del Sarto（一四八七―一五三一）イタリアの画家。

一五二〇年四月六日のラファエルの死の通告を受け取った夜のこととして、ゴビノウがミケランジェロにさせている長い独白の中で、月光を浴びてひとり石に座しながら彼は語る。

――「私が生き残った、ほんとうに。……たゞひとり生き残った。……去年はレオナルドだった。……今はあの人の番だ。私ども三人が知っていた人々、聞いていた人々、それは皆ずっと以前に死んでしまっている。ほんとうだ、私ひとりが生き残ったのだ。全一の人になれたら、唯一の人になれたら、最大の人になれたら、世界の創造主の秘密をだれにもやらないでこの私にだけゆだねられた者になれたら、と、どんなに思ったときがあったことか。宇宙の中心に、比べるものもなく、肩を並べるものもなく、太陽のように存在すること、それこそ人が望みうべき摩訶不思議の幸運だ、と、そう思ってみたこともある。……」――しかし彼は今幸福だったろうか。彼もまた長い年月レオナルドがきらいであった。心の底ではラファエルと争ってきた。だれかれとなくすぐれた人人を心の中で裁いてきた。そして今はついにおのれたゞひとり、もとよりチシアンもいる。アンドレア＝デル＝サルトもいる。しかし彼らはとうていレオナルドやラファエルの比ではない。彼はつくづく寂しくなった。「空の星が消えたのだ。私ひとり、……たったひとりきり、私は自分の孤独に窒息する。……」――月の夜ふけに寂しい独白がまだ続いてゆく。しかしミケランジェロの寂しさはこうしたことがその本すじであったろうか。「私はひとりだ、あそこに口を開いた墓穴の氷の息が私のほお

ヴィットリア＝コロンナ Vittoria Colonna（一四九〇―一五四九）イタリアの女流詩人。
ソネット Sonnet 十三世紀ごろイタリアに起った十四行の詩形。

を打つ。藝術はどうなってゆくのだろう。」――周囲を見返せばこのこともまた寂しいことには違いなかった。藝術こそは、移ろういのち、限りあるいのち、はかなきいのちをさゝえてこれを永遠にするものであると確信していた彼にとって、この道の凋落を目の前に見ることはまったく巨匠にふさわしい絶望的な嗟嘆に値するものでなければならないに違いなかった。マッコウスキーが言っているように、「いっさいの美は永遠の根源美の影にすぎない、このものは藝術家の作品において永遠に存続するのである。」というのがミケランジェロの堅い信條であった。ヴィットリア＝コロンナに寄せて歌った一つのソネットの初めの二連に、

長らひし身にぞ知らるれ、
あゝきみよ、なめ石に刻みし姿、
そを彫りし人のいのちの
窮み超えなほ朽ちずとは。

工人の技の遺れば
自然とて、技には克たず、
時も死も何かはあらめ、
よき技の永遠に栄ゆれば。

と彼が歌っているのを見いだすことができる、だから藝術の消長は直ちに彼の喜悲につながるとして

も、藝術そのものの意義が直ちに彼の苦悶の対象になるとはいわれなかったであろう。――それにもかゝわらずしかし実はそうではなかった。彼の眞実の苦しみは、いたましくもいっそう深かったのである。ヴァレリーは「レオナルドにとっては天啓などというものはない。その右側に開く深淵もない。深淵があれば彼は橋を思うであろう。深淵はある機械じかけの巨鳥の試驗に役だとう……」と言っているが、陰をもたないこの叡知の人とは違って、ミケランジェロにはかえって深淵が横たわっており、天啓が必要であったのである。藝術意識の險しい峰への登攀がその高さにきわまったところ、そこから更に深さへの登攀が、すなわち全然他の次元への登攀が続かなければならなかったのである。鑿の意志が窮まるところ、そこにやみの深淵が彼を待っていた。それはおそらくレオナルド的知を越えた世界であった。彼の苦悶の眞実の底はこの世界に深く根をおろしていた。疑いの黒い霧がこのやみの底からまき起ってしば〳〵彼を包んだのである。

ヴァレリー Paul Ambroise Valery（一八七一―一九四五）フランスの詩人。

それはこの巨匠の若いときからのことであった。早くからプラトン哲学に引きつけられ、美に対するたちがたい魂の要求に生きた彼は、コンディヴィの傳記が傳えているように、同時にまた「神をおそれる人」であった。ギリシア的なものとキリスト教的なものとの到達すべからざる調和、美に陶醉した魂と宗教的禁欲との宥和しがたきあらそい、――彼の内心の疑惑と嵐とはしかしその哲学ではどうすることもできなかった。同じ傳記記者はまた彼がサヴォナロラの説教に深く心をうたれ、長くきもに銘じたことを報告している。藝術家ミケランジェロの美に対する上引のごとき信條は、多くの場合彼をこの深淵から守ってきたには違いなかった。しかしそれは深淵の消滅を意味しはしない。自画像の黒いひとみの底に、私はこの深淵を見つめている悩める魂を見る。――深淵を知の架橋によって超えうる人では彼はなかった。その黒きひとみを見よ。それは藝術的独創性の激しき闘争の戰場において、現実の世界の辛酸に疲れ果て悲傷しているだけの表情ではない。絶望をもってやみの深淵を凝視しているひとみである。――

サヴォナロラ Girolamo Savonarole（一四五二―一四九八）イタリアの宗教改革論者。

しかし時はついに來た。ヴィットリア＝コロンナの出現がそれであった。

女流詩人は四十六歳、カペラ＝シスチナの「最後の審判」に従事していた彼はその時既に六十三歳であった。彼女がローマに來たときは彼らはしば〳〵語りあい、また離れているときはしば〳〵書簡の往復がかわされた。

彼女の友情は彼に何をもたらしたか。それはあたかも彼の暗い底流のうえにそれにもかゝわらず明かるく輝かしく堅持されていた藝術に対するかの信條の徹底的粉碎以外の何ものでもなかった。一つの書簡において彼女は鋭く彼に書き送っている。――藝術家的卓越からくるあなたの名声がはなはだしく偉大であるがために、時とともにあるいはまた他の理由からして、それが顚落することがありえようなどとはおそらくあなたは考えはしなかったであろう。

カペラ＝シスチナ Capella Sistena イタリア語。ローマにあるスイクストス法皇四世が建てた教会堂。ミケランジェロの壁画で有名。

もし「神の光明」が、あなたの心を照破して「地上の名声はたとえそれがいかに長く続こうともけっきょくその第二の死を見いだす」ことが示されなかったとすれば――と。ヴィットリアにとっては人間が創造するいっさいのものは、人間にかゝる力を與えた神に対する感謝の表現でなければならなかった。己が名声のためにではなく、神をたゝえるための奉仕として藝術は作られるのでなければならない。傲慢な心から出た制作はこと〴〵くむなしい。たゞ眞実に謙虚な心に向かってのみ神の恩寵は下る。彼女のこのような信仰が、マッコウスキーのことばを借れば、「彼の暗黒の内に星のようにのぼ

って行った。」のである。かくしてついに「プラトン学徒と信仰深きキリスト者との宥和」がこゝに成就した。しかしこの宥和は單に高さを志した鑿からうち出されたものではなかった。この方向において、鑿はかえって打ち破りがたきやみの限界に行きづまらなければならなかった。深さへの登攀は、鑿の意志の滅却を介して、その絶対的な自己否定を介して、はじめてその道が開けたのである。やみは長い間彼の生活をその底から脅かしていた。ヴィットリアとあい会うた「最後の審判」に熱中していたころも、深い懐疑が彼の魂の安息を脅かし続けていた。彼女はかえって彼が運命的になってこの世に生まれてきたこのやみに向かって、あえて正面から彼を直面せしめたものということができる。深淵は橋なくして一躍に超えられた。むしろいかなる橋もなかったがゆえに……。たゞ天啓の閃光がこの絶望の魂には必要であったのである。

安息が彼に來た。「ミケランジェロはもはや彼の誓については考えなかった。たゞ神の誓についてのみ彼は考えた。」ロマン＝ローランはそう書いてゆく――「藝術は彼にとって神に仕えるための單に手段にすぎなかった。彼は書きしるした。『藝術が偶像であり支配者である、という情熱的な構想、私のこの迷いはいかに大きなものであったか、それが私にわかった。』と。」そしてあたかもこの心境が彼が聖ペテロ寺院の建築にとりかゝったときの心境であった。「神によってこの職場に置かれた」ことの確信を彼はその甥レオナルドに書き送り、そして言っている。「私はこの職場を去ろうと欲しない。なぜなら私は神に対する愛から奉仕し、そしてこの職場に私の全希望をおくのだから。」

しかしローランも言っているように、ヴィットリア＝コロンナが彼の内に点じた信仰の光は、「けっして消えなかったとはいえ、しかし疑惑と絶望との夜をとおしてのみそれは灼熱した」のであった。

ロマン＝ローラン Romain Rolland（一八六六―一九四四）フランスの思想家。小説家。

やみが消えて白晝の和光のみが彼を包んでいたのではなかった。カペラ＝シスチナの光の創造に、逃げゆくやみがなお残されていたように、この悩める人にとってやみは運命的であった。限りなき愛と救いとを知りながら、その世界の内を彼は神を求めて制作に骨を刻まなければ生きられなかった。「完全なる作品を形成しようとの努力ほど神を近づけてくれるものはない、神は完全性であるのだから。」かくしるした彼はその臨終の床においてたゞ二つのことが彼を悔いしめる。一つは、なすべきであったにもかゝわらず、すべてを自らの魂の救済のためになしたのではなかったこと。いま一つには、彼がようやくその使命の初歩を始めたばかりだのに死んでゆくということ。――かく語らなければならなかった彼であった。ことに四十七年二月二十五日、ローマの聖アンナ修道院におけるヴィットリアの死の後の彼の晩年の制作のテーマは悲痛のきわみであった。コンディヴィはこの日より後の彼について「彼は長い間、さながら心意を失えるもののごとく、喪心の状態にあった。」と報告している。その後彼はまったく現世的名声の要求を離れ、死に至るまでついにその詩を上梓することさえも断念した。ダンテにおけるベアトリチェをミケランジェロにおけるヴィットリアにおいてみることは、マッコウスキーも試みているように、けっして唐突なことではない。彼もまた氣高き女性に導かれて永遠の光を見たのである。しかしそれは彼においてはたゞ「疑惑と絶望との夜をとおしてのみ」輝く光であった。晩年の未完成のピエタの制作は、老いゆく巨匠の悲しき心と慰めとを、見るも悲痛な姿において刻み出している。――近づく死の思いに彼はしば〳〵沈んでいった。彼の悔恨ははたして正しくかつ贖罪に値するだろうか。盲目の生活が長すぎはしなかったか。――懺悔はあまりにおそすぎはしなかったか。またしても古い疑惑に彼は悩みぬかねばならなかった。こうした懊悩の日にくり返し彼の心に映

ダンテ Dante Alighieri（一二六五―一三二一）イタリアの詩人。ベアトリチェはその恋人。

ピエタ Pieta イタリア語。マリアがキリストの死骸をひざの上に抱いて嘆いている図。またはその像。

じてくるものは、彼の詩の一節が示しているように、「われ〳〵を抱き取らむと、十字架より手をさし延ぶる」悩める救世主の姿であった。絶望的救済の神の悲願の姿であった。罪の人類の救済のためにその子を十字架につけた神の愛、悩めるキリスト――それが彼の制作のテーマとなってきた。鑿を執って彼は石塊に向かった。刻むことにおいて見るほかに、彼にはこの愛を見きわめるすべはなかったのであろう。三たび彼は石に向かった。そして三たびとも未完成のまゝそれは残された。フロレンスのドームの四人の群像ピエタ、パレスチナの聖ロザリア寺院の三人の群像ピエタ、そして最後にローマのパラツォ・ロンダニニのふたりのピエタ。――見つめる目の前にヴィジョンが動いていったものとみえる。最初にアリマティアのヨセフが消えた。次にマグダリアのマリアが消えた。最後に聖母とふたりきりの、おろされたキリストが残ったのである。いかに刻まれたか。それを考察することはこゝでの目的ではない。たゞしかし、三つとも特に十字架からおろされたキリストがテーマとなっていることにじゅうぶん留意されなければならない。四人の群像ピエタにおいて、力なくくずれ折れてゆくキリストの姿が、それをさゝえる三人の人々に囲まれて、いかに哀切をきわめているか、聖ロザリア寺院の同じくくずれ折れてゆくキリストの肩越しに後へ投げられた頭部の力なさ、――老いゆくミケランジェロが深く見つめていたものの姿が、いたましくわれ〳〵の胸を打つ。破壊の程度も未完成の程度も最もはなはだしいロンダニニのピエタにおいて彼が見きわめようとした姿ははたしてなんであったか、――最後の日まで鑿を加えることをやめなかったこの永遠の未完成ピエタにおいて、見果てぬ姿を永遠に見つめつゝ彼は死んでいったのかもしれない。

（「表現愛」による）

研究の手引

一、ラファエルの死を聞いたときのミケランジェロの心境について話しあう。

二、レオナルドとミケランジェロとの性格を比べてみる。

三、ミケランジェロの絶望を救ったヴィットリアの友情について話しあう。

四、できればミケランジェロの彫刻の写真を見て、感想を文に書く。

八　生活と文学

青野季吉

文学と人間、文学と生活、これは現代文学の重大な問題である。日本文学に大きな反省が要望せられているとき、この文を読んで考えを深めよう。

青野季吉は、明治二十三年（一八九〇）新潟縣で生まれた。文藝評論家。著書には、「文学の精神」・「文学の本領」・「心輪」などがある。

一

文学は、実生活とは、運命的にある距離をもったものである。それを距離というふうに考えないで、文学と実生活とは、そのよって立つ次元が違うというように、哲学的に解釈しきる者があるかもしれぬ。それはいずれにせよ、その矛盾なり、乖離なりの意識に圧迫されて、常にいずれかの一方を思慕し、あるいは両方の間に彷徨を続けるのが、現実の文学者である。表面では、どのように不動の姿勢をとっていても、内部のいかなる瞬間にも、その思慕の彷徨を強いられない文学者を、想像すること

二葉亭四迷（一八六四―一九〇九）小説家。

はできない。二葉亭四迷は、文学は男子一生の仕事にあらずといった。実際には彼の書いたもののどこにも、そんなことばはみえていないが、彼がそういう思想につかれていたことは「私は懐疑派だ」その他の感想によって、疑うべくもない。すなわち二葉亭は、今いった矛盾なり、乖離なりの意識に拘泥して、文学を第二義的とし、実生活的行動を第一義的としたのである。この方向では、彼はまさにわが近代文学者での代表的存在である。その結果、ついに彼は、文学を放棄してしまったが、それならば、長らく憧憬した実生活的行動において、彼が何ほどのことを成就したかと考えると、はなはだ悲しむべき示唆しか残していない。露都の雪の大路に倒れ、インド洋に逝いて、ついに行動的な何ごとも成就できなかった彼の悲劇は、文学の才能にめぐまれたもと〳〵文学的人間ともいうべきものが、文学においてのみ実現することのできた夢なり、可能なりを、実生活的行動において実現しようとしたものの悲劇でなければならない。極言すれば、文学を放棄したとき、既に彼は実生活をも失ったのだともいえるのである。

芥川龍之介（一八九二―一九二七）小説家。

文学を捨てることはできるが、実生活を捨てることは、人間である以上、不可能である。したがって二葉亭と逆な場合の徹底した者、純粋な者の実例を求めることはできない。いわゆる藝術至上主義なるものは、藝術文学を第一義とし、実生活を第二義とするものであるが、先にも言ったように、実生活を犠牲として文学を救うなどということは、徹底した意味においては、一片の美辞にすぎない。強いてわが近代文学にその例を求めれば、芥川龍之介をこゝにあげることができようか。芥川はもちろんけっして実生活を捨てもしなければ、犠牲にもしなかった。しかし彼が生命のほとんど全價値を文学においていたのは疑えない。彼にとって実生活の現実は、たゞ憐憫と軽蔑にしか値しなかったといっても過言ではない。一つの美しい瞬間、一つの美しい創造のためには、自分の実生活を、自分の生命を犠牲としてもいいというふうに、彼は考えていた。文学にすべてを賭けるということばがあるが、じっさいその賭けに生きた例はわが文学者にはむしろまれである。ひろい意味では、だれも賭けをしているといっていいが、賭けの精神といったものはむしろまれである。芥川はそのまれなひとりといえるであらう。芥川の死の秘密は、今に解けない。その死にだけ拘泥したら、永久に解けることはないであらう。しかし彼の美しい、ないしは醜い死は、文学の美にいっさい賭けた末に、その賭けを失い、もはや賭ける何ものもなくなった者の死でなければならない。そして彼は、その死までを美しい死であらしめようとして、死に死を賭けたのである。それが彼のたくんだとおり、美しい死でありえたか、それとも自然に負けた醜い死に終ったかは、こゝで問わないが、彼のその死への過程が彼の自然――実生活を失っていった過程であり、死はたゞその単純な帰結にすぎないことは、明らかである。それをまた、常識的にはなるが、犠牲にされた実生活の復讐と考えることもむりではない。

廣津和郎（一八九一―）小説家。評論家。

文学と実生活の間を彷徨し続けた文学者は、その数に限りがない。傷つき、つまずき、生身を剝がれながら、一生を文学し続けた文学者は、多かれ少なかれ、そうした彷徨者だったといえる。彼らは文学を第一義とするのでも、実生活を第一義とするのでもない。あくまで実生活者として生き、実生活を失うことなく、同時に文学者として生き、文学をまっとうしようとするのである。いわば両者の統一を文学において完成しようとする、難行苦行者である。かつて廣津和郎は、島崎藤村の「家」を読んで、その追究の冷酷さに目をみはり、「――何か沒落してゆく人物たちを片っ端から作者が食べ、それを栄養として作者ばかりがっしり肥えてゆくような氣がする。（藤村覚え書）」と書いていた。同

感である。この場合、ほんとうにがっしり肥えていったのは、生身の藤村ではなくて、もちろん藤村の文学である。そしてその追究の冷酷さはまさに苦行者の姿ではないか。藤村とは違った形で、同じく彷徨者の代表的なものに、徳田秋声がある。

彼の「一茎の花」が、客観化の点で、正宗白鳥の非難をかったとき「正宗氏へのお願い」という答弁の中で、秋声は次のように書いている。「――地球がいくら生物の棲息所として不安な所であっても、人間は生まれた以上はやはりそこに家を建てて住まわなければならない。そして生活を営まなければならない。そこに人間の生きる希望があり、悦楽がある。地震があっても、何があっても、最善の道を選んで生きるのもまた楽しい。地球が始終ぐらつくからといって、天上に逃げるわけにはいかない。ぐらつく地上になるべく堅固に礎石を置いて、そこに住居を建てなければならない。人間の生活はすべて相対的である。絶対へ行こうとすれば行き詰まるに決まっている。科学にしたところで、建築の基礎と同じような仮定の上に築きあげられるのがふつうのようである。客観小説といったところで、どんな意味にも自身の生活経験が基礎とならない場合はない。ゲーテは自身の身のまわりの、よくわかっているところから書いてゆくのが藝術の修業だ、というようなことを言っていたと思うが、そのことばは先生が若い学生に教えるものらしい親切がある。『――私などは自分の身辺の日常茶飯事さえも、完全にわかっているかどうか疑わしい、まして書くこととなればなおさらである。たゞ最もよくわかっていると思われることから書くよりほかはない。』――。」

こゝにすべてが語り盡くされている。藤村のような苦行者の形相はないにしても、文学と実生活の間の永遠の旅人といった、救われぬといえば救われぬ秋声がはっきり表われている。もっとも秋声自身、「最もよくわかっていると思われること」を書くことによる以外、他のどんな救いも求めはしなかった。それはもちろんである。

徳田秋声（一八七二―一九四三）小説家。自然主義派の代表的作家。

正宗白鳥（一八七九―一）本名忠夫。小説家。

二

文学と実生活の一般的の関係は、そのようなものであるが、文学が実生活の糧をどのような仕方で摂取するかは、また別問題である。なおこゝではさんでおくが、文学がその体軀を育てる糧は、実生活に限ったものではない。実生活以外、たとえばひろく教養とよばれるものからも、また先行の文学からも、その糧を得てくる。いやあらゆる人間精神の所産で、文学にとって糧とならないものはない。その意味で、文学の胃の腑ほど、強くて、常に糧に飢えているものはないといえる。こゝにおのずから文学に二つの型ができるわけである。藝術の端緒は、実生活の見聞や関心事の素朴な再現であったに違いなく、その再現ということの要求の中に、多少とも超越的なものが潜在したわけであるが、その藝術のうちに文学が現われ、一方に人間精神の所産が豊かになってゆくにしたがって、文学におのずから二つの型が生まれないわけにいかず、また実際に生まれたのである。一つはより多く実生活の現実の糧によって養われる文学であり、他はより多く精神的所産の、いわば非現実的な糧によって養われる文学である。生活に即した文学とか、生活から遊離した文学とかいうことが、ひところよく批評のことばとして使われたが、この相違や対立も、もとはといえば、そこから出てくるのである。文学における現実主義と理想主義の対立の根源も、そこに見いだされるといっていいであろう。

文学が実生活の糧をどのような仕方で摂取するかという問題にかえって、そこにもはっきり二つの型が考えられるし、また存在してきたのである。一つはその摂取にある限界をおき、文学に求められ

紅葉（一八六七—一九〇三）本名尾崎徳太郎。小説家。
露伴（一八六七—一九四七）本名幸田成行。小説家。
潤一郎（一八八六—）姓谷崎。小説家。
独歩（一八七一—一九〇八）本名國木田哲夫。小説家。
スクール（School）流派。

る規範的なものと一致や調和を重んずる仕方である。他は、そうした規範的なものなどにいっさい拘泥しないで、できるだけ多量に、貪婪にその糧を取り、時としてはその文学が傷つくことも恐れない仕方である。もし規範的なものがいるとすれば、まさにその糧の中に、新しい規範を求めようとする仕方である。前者を古典主義的の仕方とすれば、後者はいうまでもなく現実主義的の仕方である。この二つの型は、どこの國の文学にもいろ〳〵な型で普遍的にみられるのであって、わが近代文学にも、もちろんそれを跡づけることができる。紅葉と露伴の並び立った時代をはじめ、自然主義と、反自然主義との二つの流れが、あるいは平行し、あるいは微妙に交錯しだした時代を顧みると、その跡の歴然としたものがある。そこに何もことばの厳密な西欧的な意味における古典主義と現実主義の対立があったというのではない。そんな意味においては、わが近代文学には、古典主義・ローマン主義・現実主義さえもの、どんな作品も存在しなかったといえるほどである。

そうではなく、実生活の現実に対する古典主義的の態度と、現実主義的のそれとの対立についていっているのである。そうするとたとえば、露伴の「五重塔」と紅葉の「多情多恨」に、漱石の「草枕」や潤一郎の「刺青」と、独歩の「竹の木戸」や秋声の「新世帯」とに、だれも容易に、はっきりと二つの型、二つの仕方をみてとることができる。その以後のさま〴〵なスクールの作品についても、同様である。たゞわが近代文学の場合、個々の作家においてもそうであるが、全体としても、古典主義的な仕方が、次第に、現実主義的な仕方に吸収されていって、頑固に古典性を守って変わらない作家のないことが、特色といえば特色であるが、それも必ずしも、わが近代文学に限ったものでないかもしれない。

オルダス＝ハックスレー Aldous Huxley（一八九四—）、イギリスの小説家。文藝評論家。

実生活の現実に対するその二つの態度を更にはっきり知っておくために、オルダス＝ハックスレーの印象深いことばをこゝに引例しておこう。彼は、フランスのある英文学の教授から、新古典主義者といわれたことに腹をたてて、こう論じたことがある。——自分は新はおろか、どんな種類の古典主義作家でもない。第一に自分は藝術において普遍的なものや純粋なものよりも、潑剌としたもの、不純なもの、不完全なものが好きだ。第二に自分は、古典主義的な形式追求のむずかしさなどよりも、生の現実という無限に複雑で神秘的なものを、適切に表現することの方が、はるかに困難だと考えており、古典主義的な規律は、この困難からの逃避であり、脱走であると考えているのだ。もちろん藝術には、古典主義の説くように、單純化は必要で、それがなければ現実を藝術的に取り扱うことはできない。しかしその單純化を最少限度にして、直接経験の性質を文学によって表現しようとするのが、自分たちの抱負なのだ。いってみれば、究極には表現できないものを表現することである。その「できないこと」の完成に多少でも近づくことは、單純化や切り捨てなどで完全に実現のできる古典主義の理想などよりも、はるかにむずかしい仕事だと自分は考えている。いったいわれ〳〵が実生活で、感覚なり、直覚なり、感情なりで直接に受ける現象の意識は、後になってその意識から形づくる観念などよりも、比較にならないほど微妙なものだ。一つの現実は、どんな小さなものを例にとっても、無限に錯雑している。理論がいかに緻密であるにしろ、説明がいかに手がこんでいるにしろ、要するにそうした錯雑きわまる現実を、單に、大まかに、乱暴に、單純にしたものにすぎない。——

三

文学がそのように実生活の糧によって育つものだとすると、実生活の貧困からは、とうてい肉体の

豊かな、またはたくましい文学は生まれないということになる。これは物理的の自然法則と等しいもので、最も極端な場合を想像してみれば、だれにもすぐわかることである。実生活が日夜たゞ地をはうような、貧寒な人間的というよりも植物的というに近いものであったら、そこにそも〳〵文学がありうるかどうかも疑問だが、仮に文学の種子がそこへ落ちたとしても、それ相應の貧寒な開花しか遂げることができないのはいうまでもない。およそ文学がありうるためには、人間的な実生活があり、それがある度合の豊かさを持たなければならない。先に述べた訣別や超越は、その豊かさがあって初めて考えられるのである。ところでその実生活の豊かさなるものは、いうまでもなく廣くその社会や國家の生活とつながるもので、社会生活や國家生活の豊かさは、同時に、個々の人民の実生活の豊かさとしなければならない。もし仮に実生活に対して否定的なまたは戒律的な態度をとり、自ら求めて実生活の豊潤化を排するような場合があっても、彼のおかれている社会生活なり、國家生活なりが豊かであれば、彼の否定された実生活も、その否定や戒律にかゝわらず、おのずからある豊かさを身につけているのは、自然である。第一、そういう否定や戒律が求められるということが、実生活におけるそれだけの豊かさを物語るものでなければならない。これまでの文学者には、実生活に対して肯定的であるよりも、否定的であるものが圧倒的に多かったといっていいが、それは決して彼らの実生活の貧寒さを意味するものではなかった。彼らの否定的態度は、凡庸な肯定的態度よりも、どれだけ精神的に豊かなものであったかしれないが、それは同時に彼らの実生活についていえることである。

わが近代文学は、ヨーロッパ文学と比べて、肉体が脆弱であるという自己批判は、今では一つの常識とさえなっている。そして文学精神のうえから、または文学者の心構えのうえから、さま〳〵な論議が試みられているが、その爭うべからざる文学的運命を、作家の実生活の面から、それと社会生活や國家生活のつながりの面から、更にその社会生活や國家生活そのもののありようから、究明したものはほとんど見あたらないようである。それではその眞実をつきとめ、その運命を変えることなどは、思いもよらない。わが近代文学の肉体の脆弱さ、私小説的の規模の狹小さは、いうまでもなく、個々の作家の実生活の貧困さに基づくものでなければならない。彼の実生活が要するに封鎖的であり、「私的」であり、ほとんど社会的のひろがりをもたないのに、文学の肉体だけが豊麗であり、強靱であろうとすることは、できない相談である。そしてその実生活の貧困さはこれもまたいうまでもなく、わが社会生活や國家生活の貧困さと、深く廣くつながるものでなければならない。半封建的で人民の自由や解放というものが、ほとんどなかったこれまでの日本の社会生活や國家生活は、他に豊かな何があったにせよ、人間的にこれほど貧困な環境はなかったといわなければならない。こういう寒寒とした環境の中で、文学者の実生活がひとり豊かであり、文学の肉体が脆弱でなかったとすれば、それは奇跡である。むしろ日本の近代文学は、その肉体がヨーロッパ文学に比べて脆弱には違いないが、しかし國家的・社会的・個人的に、かゝる不利な條件におかれたものとして、むしろ「奇跡的」に、その肉体が強靱だったといわなければならない。脆弱性の自己批判は、往々これを忘れがちである。わが近代文学には、ほそ〳〵と身を守ってきたものの脆弱さや貧寒さはあるが、同時に、そういうものだけが持ちうる強靱さがあると、ある中老の作家が世に抗議するような語調で語っているのを聞いたことがある。同感という外はない。

しかしそういう消極的な強靱さは、もはやきのうまでのものである。これからの日本文学は、ほそ

ぼそと身を守ってきたものの脆弱さから、勇敢に脱却しなければならない。――問題がこゝへくると、だいぶ主題の平面を飛躍することになるが、それは仕方がないとして、その脱却はそれならどうして可能であろうかという問題が、次に起ってくる。そして最後には、國家生活や社会生活の解放、変革に対する作家の責任という大きな問題に到達しないわけにいかない。作家は、たゞ制作に精進することによってその責任を果たせばいいので、文学と実生活の実際の関係は、それ以外にありえないとする考え方がある。そうではなく、作者もまた、その解放・変革に対して、行動的に参加する責任があるとする考え方がある。この二つの考え方の正否を抽象的に論ずることは、ほとんど無意味に近い。たゞ明白なことは、いずれにせよ、作家はだれもその責任を果たさなければならず、しかも彼に相應した最も効果的な仕方で、それを果たさなければならないということである。彼に相應した最も効果的な仕方といえば、いうまでもなく、文学を媒介とする仕方であるが、しかし文学することは、必ずしも作品を書くということに限られたものではない。作品は彼の集中的表現であるが、文学することは、それを含んだ廣汎な創造的行動でなければならない。そうとすればその責任を果たす仕方にも、作品以外、文学者独自の仕方が求められるはずである。徹頭徹尾、作品主義に始終することは、その独自の仕方の発見を忘り、その責任を回避する結果にならないとも限らないのである。

（「新文学講座」第一巻による）

研究の手引

一、次の問題を中心に討論する。

（イ）二葉亭と芥川の行き方について。

（ロ）「実生活を犠牲にして文学を救う」ということについて。

（ハ）「自身の身のまわりの、よくわかっているところから書いていくのが藝術の修業だ」というゲーテのことばについて。

（ニ）日本文学はなぜ貧弱なのであろうか。

二、左について、説明する。

（イ）文学にすべてを賭ける。

（ロ）文学と実生活の間を彷徨する。

（ハ）実生活の貧困からは、とうてい肉体の豊かな、または、たくましい文学は生まれない。

小説

こゝに收めた二編の小説を比較研究することは興味深い問題である。「生活と文学」を参考にして考察するがよい。

九赤がえる

島木健作

島木健作、本名は朝倉菊雄。明治三十六年（一九〇三）北海道札幌市で生まれ、昭和二十年（一九四五）神奈川縣鎌倉市で沒した。小説家。作品には「癩」・「盲目」・「生活の探求」などがあり、「島木健作全集」に收められてある。

ある日、私は桂川の流れに沿ってのぼって行った。

桂川　修善寺温泉の中を流れる谷川の名。修善寺附近を桂谷ともいう。

かなり歩いてからもどって來て、疲れたのでどこか小腰をおろす所と思っていると、川をすぐ下に見おろす道ばたに大きな石が横たわっているのを見た。疊半分ほどの大きさで、しかも上がまっ平らな石である。私はその上に腰をかけて額の汗をぬぐった。

あたりには人影もない明かるい秋の午後である。私は軽い貧血を起したようなぼんやりした氣持で、無心に川を見おろしていた。川は両岸からちょうど同じほどの距離にあるあたりが、土がむき出して州になっている。しかしそれは長さも幅もそれほど大きなものではない。流れはすぐまた合して一つになっている。こっち岸の方が深く、川の中には大きな石が幾つもあって、小さなふちを作ったり流れが激して白くあわだったりしている。底は見えない。向こう岸に近い所は浅く、河床はすべ〳〵の一枚板のような感じの岩で、したがって水は音もなく速く流れている。

ぼんやり見ていた私は、その時、その中州の上にふと一つの生きものを発見した。初めは土塊だとさえ思わなかったのだが、のろ〳〵とそれが動きだしたので、氣がついたのである。氣をとめて見ると、それは赤がえるだった。赤がえるとしてもずいぶん大きな方に違いない。ひきがえるの小ぶりなのぐらいはあった。秋の日に背中を干していたのかもしれない。しかし背中は水にぬれているようで、その赤褐色はかなりあざやかだった。それが重そうにしりを上げて、ゆっくりゆっくりと向こうの流れの方に歩いて行くのだった。

赤がえるは州の岸まで來た。彼はそこで止まった。一休みしたと思うと、彼はざんぶとばかり、その浅いが速い流れの中に飛び込んだ。

それはいかにもざんぶとばかりというにふさわしい飛び込み方だった。いかにも跳躍力のありそうな長い後足が、土か空間かを目も止まらぬ速さでけって、ぴんと一直線に張ったとみると、もう流れのかなり先へ飛び込んでいた。さっきのあのしりの重そうな、のろ〳〵とした、ダルな感じからはおよそかけ離れたものであった。私は目のさめるような氣持だった。遠道に疲れたその時の貧血的な氣分ばかりではなく、この数日來のはれ〴〵しない氣分の中に、新鮮な風穴が通ったような感じだった。

赤がえるは一生懸命に泳いで行く。彼は向こう岸に渡ろうとしているのだ。川幅はさほどでもないのだが、しかし先に言ったように流れは速い。その流れに逆らうようにして頭をつっ込んで泳いで行く赤がえるは、まん中ごろの水勢のいちばん強いらしい所まで行くと、見る〳〵押し流されてしまった。流されながらちょっともがくような身振りをしたかと思うと、それは一瞬、私の視野から消えてしまった。波に飲まれてしまったのだ。私ははっと思って目を凝らした。するとやがてそれは不意に、思いがけない所に、ぽっかりと浮いて、姿を現わした。中州のいちばんの端——中州が再び水の中に沒し去ろうとする、その突端に、かろうじてはい上がったとでもいうようなかっこうで、とり付いているのだった。

赤がえるは岸へ上がった。そこで一休みしていた。私にはその大きな腹が、せいた呼吸に波打ってでもいるような氣がした。やがて赤がえるはのたりのたり歩きだした。そしてもとの所へ——私が最初に彼を発見したその場所まで來ると、そこへうずくまったのである。

何かを期待してじっと一所を見つめているというのは長いものだ。それは長く思われたが、五分は

たゝなかっただろう、赤がえるは再び動きだした。前と同じように流れの方へ向かって。そして飛び込んだ、これも前と同じように。一生懸命に泳ぎ、押し流され、水中に姿を沒し、中州の突端に取り付き、はい上がり、またもとの所へ來てうずくまる。――何から何までが、前の時と同じ繰り返しだった。そして今、不思議な見ものを見るような思いで凝視している私の目の前で、赤がえるはまたもや流れへ向かって歩きだしたのである。

私は赤がえるを初めて見つけた時、その背中の赤褐色がぬれたように光っていたことを思い出した。してみると私は初めから見たのではない。私が見る前に、赤がえるはもう何度この繰り返しをやっていたものかわからない。

「ばかなやつだな。」私は笑いだした。

赤がえるは向こう岸に渡りたがっている。しかし赤がえるはそのために何もわざ〳〵今渡ろうとしているその流れを選ぶ必要はないのだ。下が一枚板のような岩になっているために速い流れをなしている所が全部ではない。急流のすぐ上に続く所は、よどんだゆっくりした流れになっている。流れは一時そこで足を止め、深く水をたゝえ、次の浅瀬の急流に備えてでもいるような所なのである。その小さなふちの上には、やなぎのかなりな大木が枝さえたらしているという、赤がえるにとってはあつらえ向きの風景なのだ。なぜあのふちを渡ろうとはせぬのだろう。

私がそんなことを考えている間にも、赤がえるはまたも失敗してもどって來た。私はそろ〳〵退屈しはじめていた。私は道路から幾つか石を拾って來て、中州を目がけて投げはじめた。赤がえるを打とうという氣はなかった。私はたゞ彼を驚かしてやりたかった。彼に周囲を見まわすきっかけをつくり、氣づかせてやりたかった。

石は赤がえるの周囲に幾つも落ちた。速い流れにも落ちた。ふちにも落ちて、どぶんという音は、こっちを見よとでもいうかのようだった。赤がえるはびくっとしたように頭を上げたり、ちょっと立ち止まったりしたが、しかしけっきょく予定通り動くことをやめなかった。飛び込んで泳ぐこともやめなかった。

私は石を投げることをやめて、また石の上に腰をおろした。

秋の日はいつか日がかげりつゝあった。山や森の陰の所は薄青くさえなってきていた。

私は冷えが來ぬうちに歸らねばならなかった。しかし私は立ち去りかねていた。

次第に私は不思議な思いに捕らわれはじめていた。赤がえるは何もかにも知ってやっているのだとしか思えない。そこには執念深くさえもある意志が働いているのだとしか思えない。微妙な生活本能を備えたこの小動物が、どこを渡れば容易であるか、あの小さなふちがそれであることなどを知らぬわけはない。赤がえるはある目的をもって、意志をもってあえて困難に突入しているのだとしか思えない。彼にとって力に余るものにいどみ、戰ってこれを征服しようとしているのだとしか思えない。私はあの小さなふちの底には、その上を泳ぎ渡る赤がえるを一飲みにするような何かが住んでいるのかもしれない。あるいはまた、あのやなぎの大木の陰には、上から一飲みにするようなへびの類がひそんでいるのかもしれない。というようなことも考えてみた。しかしその時の私にはそんなことを抜きにして、先のように考えることの方が自然だった。その方が自分のその時の氣持にぴったりとした。

赤がえるは依然として同じことを繰り返している。初めのうちは、「これで六回、これで七回」な

どとおもしろがって数えていた私は、そのうち数えることもやめてしまった。

川の面の日ざしがかげりだすころからは、赤がえるの行動は何か必死な様相をさえも帶びてきた。ふたゝび取りかゝる前の小休止の時間もだん〳〵短くなってゆくようだった。一度はもうちょっとのところで向こう岸に取り着くかとみえたがやはり流された。それが精魂を傾け盡くした最後だったかもしれない。それからは目に見えて力なくもろく押し流されてしまうようにみえた。坂を下る車の調子で力が盡きてゆくようにみえた。

吹く風もにわかに冷たくなってきたし、私はあきらめて立ち上がった。道風の雨がえるは飛びつくことに成功したが、この赤がえるはだめだろう……。私は立ってすそのあたりを拂った。もう一度最後に川の面に目をやった、私は思わず目を見張った。ほんのその数瞬の間に赤がえるは見えなくなってしまっていた。私はまた中州の突端に取り付いて浮かび上がる彼の姿を待っていたが、今度はいつまでたっても現われなかった。ついに成功して向こう岸にたどり着いたのだとはどうしても思えなかった。私は未練らしく川のあちらこちらを何度もながめまわしたあとでとう〳〵そこを立ち去ってしまった。

しかし川に沿うてくだってまだ五間と行かぬうちに、思いもかけぬ所で再び彼に会ったのである。今度はすぐ目の下、こっち岸に近い所だった。そこは水も深く大石が幾つも並んでいて、激してあわだった流れの余勢が石と石との間で蕩揺したりうずを作ったりしていた。そしてそういう石陰の深みの一つに落ち込んでいるのだった。こうなった順序は明らかだった。押し流されるごとに中州の突端にすがり付いていた彼は、もうその力もなくなって、流されるがまゝになったのだ。州をはさんで一つに合した水の流れは大きく強くなって、あおるような勢いでこっち岸へたゝきつけてよこしたのだ。事態は赤がえるにとって悲惨なことになってしまっていた。

彼は蕩揺する波に全く翻弄されつゝある。かろうじて浮いているにすぎぬようだが、それが彼の必死の姿であることは、彼の浮いている石陰のすぐ近くにはうずまきがあって、絶えずそこへ彼を引きずり込もうとしていることからもわかるのだった。彼に殘された活路はたった一つきりだった。石にはい上がることである。だがその石の面たるやほとんど直立していて、そのうえに水あかでてら〳〵にすべっこくなっているのだ。長い後足も水では跳躍力もきかず、無力に伸ばしたり、かゞめたりするのみだった。時に彼の前足は石の小さなくぼみにとり付いたが、すぐにくるっとひっくり返って赤い斑紋のある黄色な腹をむなしくもがいた。

私は何か長い棒のようなものをさし伸べてやりたかったが、そんなものはあたりには見あたらなかった。今はたゞじっとその帰趨を見守っているばかりである。

やがて赤がえるは最後の飛び付きらしいものを石のくぼみに向かって試みた。そうしてくるっとひっくり返ると黄色い腹を上にしたまゝ、なんの抵抗らしいものも示さずに、むしろ静かに、すうっと消えるようなおもむきで、うずまきの中にのみ込まれていった。私は流れに沿うて小走りに走った。赤がえるがふたゝび浮くかもしれぬ川面のあたりに目を凝らした。しかし彼は今度はもう二度と浮き上がっては來なかった。

私はあたりが急に死んだように静かになったのを感じた。事実、にわかに薄暗くなってもきた。

私は歩きながらさっきからのことを考え続けた。秋のゆうべ、不可解な格闘を演じたあげく、精魂

盡きて波間に沒し去った赤がえるの運命は、こっけいというよりは悲劇的なものに思えた。彼を駆りたてていたあの執念の原動力はいったいなんであったのだろう。それは依然わからない。わかるはずもない。しかし私には本能的な生の衝動以上のものがあるとしか思えなかった。活動にはいる前にじっとうずくまっていた姿、急流に無二無三につっ込んで行った姿、州の端につかまってぼっとしていた姿――すべてそこには表情があった。心理さえあった。それらは人間の場合のようにこっちに傳わって來た。明確な目的意志に基づいて行動しているものからでなくてはあの感じはこない。まして や、あの波間に沒し去った最後の瞬間にいたっては、そこには刀折れ、矢盡きた感じがあった。力の限り戰って來、最後の運命に從順なものの姿であった。そういうものだけが持つ靜けささえあった。馬とか犬とかねことかいうような、人間生活の中にいるあゝいった動物ではないのだ。かえるなのだ。かえるからさえこの感じがくる、というこの事実が私を強く打った。

動物の生態を研究している学者は、案外簡單な説明をくだすかもしれない。赤がえるの現実の生活的必要ということから卑近な説明をするかもしれない。その説明は種明かしに類するかもしれない。そして力に余る困難にいどむことそれ自体が、赤がえるの目的意志ででもあるかに考えているような、私の迂愚を笑うであろう。私はしかし必ずそうだというのではない。動物学者の説明の通りであってもいい。だがかえるのごとき小動物からさえ、あゝいう深い感じを受けたというそのこと、あの深い感じそのものは、学者のどのような説明をもってしても、おそらく盡くすことはできぬのである。

私は自然界の神秘ということを深く感じていた。私としては実に久方ぶりのことであった。天体のこと、宇宙のことを考え、そこを標準として考えを立ててみる、ということは私などにも時たまあ

る。それは一種の逃避かもしれない。しかし豁然とした、救われたような心の状態を得るのが常である。その時と今とは同じではない。しかし自然の神秘を考える時にもたらされる嚴粛な敬虔な引き締まった氣持、それでいて何か目に見えぬ大きな意志も感じて、そこに信頼を寄せている感じには、両者に共通なものがあった。

私は書出た時とは全く違った氣持になって宿へ帰った。

私は翌日その地を去った。たずさえて來た一冊の書物も読まず、たゞあの赤がえるの印象だけを記憶の底にとゞめながら。

（雜誌「人間」創刊号による）

研究の手引

一、赤がえるが、作者の目に映じてから、うずまきに飲み込まれてしまうまでの動作を書きあげてみる。

二、赤がえるが川を越えようとして、最後まで格闘を演じた執念の原動力を、作者はどういうように解釈しているか。

三、作者が「自然界の神秘ということを深く感じた」のは、何をさのように考えて感じたのか。

四、作者が、「それは一種の逃避かもしれない」という、その「それ」は何をさすか。またどうして「逃避かもしれない」というのか。

五、作者の書出た時と夕方帰る時との氣持の相違を説明してみる。

六、この作品の主題について話しあう。

一〇　富士と水銀

橋本英吉

明治二十八年の秋から冬にかけて、富士山頂でわが國最初の高山氣象觀測が行われた。それをくわだてた野中至は二十八歳の青年であった。その妻の千代子も死を決して夫と辛苦をともにしたが、ついにふたりとも中途で下山しなくてはならなくなった。しかしこの壯挙は今日の世界的な富士觀測所の基礎になったのである。

橋本英吉、本名は白石亀吉。明治三十一年（一八九八）福岡縣で生まれた。小説家。著書には「柿の木」・「系図」・「富士山頂」などがある。

一

千代子を助手に得た至は、二時間の暇を安心して眠り、觀測に專念できるようになった。それは至自身が考えるよりも、重要な意味をもっていた。それは婦女子さえ頂上で冬ごもりができる。まして設備をより完全にすれば、越年觀測も容易であることを、証明できるわけだったから。

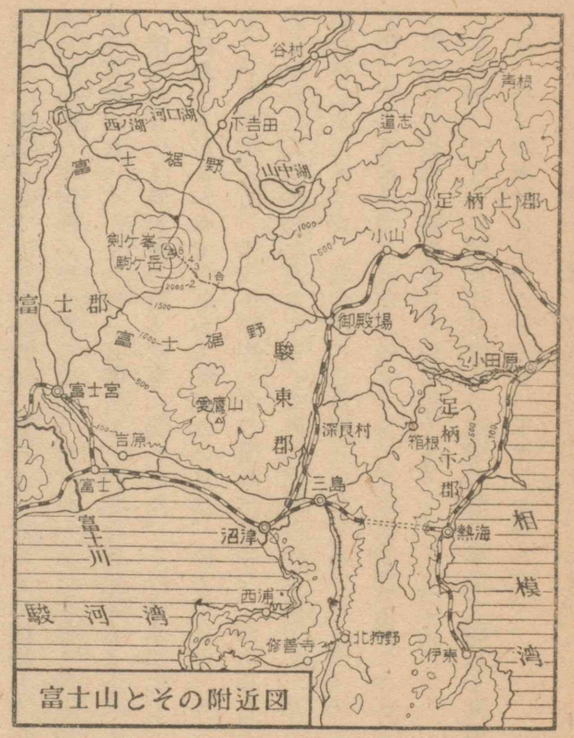
風力計も風信器も軸が凍りだした。初めは熱湯をかけていたがそれも効果がなくなるほど、日に日に氣溫は下がっていった。十月の氣溫は最高零下二度、最底は零下四度二分だった。觀測のたびにかなづちで氷をたゝき落さねばならなかったが、柏油を濃く塗っておくと、氷が落ちやすいことを知った。ところが今度は、濕球寒暖計も布が凍って役にたたなくなった。毛筆で球をしめしてしばらくはしのいだが、氣溫の下がるにつれて、ぬらした毛筆自身がその場で凍り、また居室にもどって溶かさねばならなかった。ある時、水を入れた杯を器械室に忘れて帰ったことがあるが、次の時間に行ってみると、水は丸い氷塊となって、杯はみじんに碎けているのを発見した。そうなると記入の時、ちょっと鉛筆をなめたのが凍って、書けなくなることもあった。

居室はずっと毛布を張って、晝もランプをつけていたが、室内の水蒸氣が毛布の上で凍り、かびのように白くついているのだった。出入口のとびらも凍りつく日が多くなった。ふたりはなるべく戸外に出て、運動することに努めたが、氣持よくなるまで運動しないうちに、呼吸が苦しくなり、寒氣のためにかえって関節が痛くなるのだった。だから三十分も外氣の中に立って、回光儀で信号することは不可能になって、もっぱら日時計で、時刻を修正することにしていた。

晴天の日にも風がある限り吹雪に襲われた。それは氷盤になった上に積もった新しい雪が、苛烈な風に舞い上がるからで、しかも風のない日は、十月中にたった三、四日にすぎないありさまである。そういう環境にも、千代子は少しずつ慣れはじめた。高山病ともいうべき頭痛や吐氣もおさまって、雪を溶かして飲食物を煮ること、これが三畳のへやに閉じこめられた彼女のたゞ一つの仕事であり、また楽しみであった。朝食の次に晝飯というぐあいに、限りのある原料を駆使して、変わった味わいを出すくふうに全力を費やすのだった。至には觀測の楽しみがある。水銀を通して聞く自然界の物語は限りなく複雑で盡きることがなかった。

ある朝、千代子に起されて四時の觀測に出た至は、珍しく風がなく、星のきらめいているのに氣がつき、まだ御來迎を見たことのない千代子を誘った。

「えゝ、ぜひ拜みたいわ。でも外に出られますかしら。」



富士山とその附近図

彼女はもうしたくをしながら元氣よく答えた。

「とにかくぼくが先に出て氷を割るから、おまえが内から押してくれ。」

このごろでは出入口は吹きたまった雪が凍りついていたので、至は窓から出入していた。凍ったまゝにしておくと、すきまから風がはいらないという便利もあった。彼はつるはしと手さげランプをもって外に出ると、念入りに氷を削り落して、内外から力をこめてやっと押しあけた。

風力計のある岩に登りやすいように、彼は前から一本の麻なわをたらしてあったが、すっかり棒になっていたし、また十字型の風杯についた霧氷は、風の方向に、飛行機の垂直尾翼のような十字板を作っていた。千代子が何度もすべるので、至が手を引いてやると、かえってふたり一度にすべるのだった。

「ごめんよ、ねえさん。」などと至は冗談を言いながら後にまわって、千代子を押しながら登って行った。

東の空には、はや一條の薄明かりが、サーチライトのように横にひろがっていた。地上はかえって夜中より暗かったが、その中でも大噴火口は、眼下にあって底知れぬ暗さをたゝえていた。成就が岳が馬の背のように、なだらかな一線を引いているかなたに、箱根・丹沢の連山が青みがかった黒い塊を見せていた。谿谷からは厚い白雲の團塊が徐々にひろがり、やがて峰々だけを雲表に残し、大地をおゝってしまった。波の中に浮いた島のように、山峰は孤立したのである。また富士自身も、大きな首巻きを当てたように、周囲を雲の層に囲まれてしまった。東の空は次第に明かるさを増す。雲の形、山の色は一分も変化をやめることはなかった。甲斐・赤石の山々では雲はいよ〳〵厚くなり、甲斐駒と赤石の主峰だけが雲表にそびえていた。ところが見ているまに、富士川を境にして雲の間に断層ができた。その断層は千メートルもありそうな厚みで、切口は垂直にたれ、すだれのように美しく細分されたすそには、富士川が白々と浮いているのだった。

すりガラスほどの明かるさは、紺に変わり、すぐ緑色に明かるむ。雲の薄墨色の上にもその緑色がひろがる。やがて緑が紅に徐々に、変わるかと思うまに、たちまちまっかな朝日が上辺を現わす。その瞬間、眞紅の光輝は長く尾を引いて、雲表を紅色に染めてゆくのだった。その輝きが富士川の上にできた雲の断層に当たると、雲のすだれは紫の滝となってひらめきわたる。太陽が地平線を離れるせつな、眞紅は頂点に達する。空も雲海も峰々も、光線の屈折してくる方向につれて、この時万化の色彩を織りだす。相模湾の上には、レンズ形の雲がある。その周辺は眞紅に輝いているが、中ほどは黄色、まん中は暗い紫色に染まって、横になびく幟となる——。

至の顔も、千代子の髪も眞紅に色どられ、目は紅石のように光っていた。初めてこの御來迎の前に

立った千代子は、感動のため硬直していた。しらずににじみ出る涙を隠そうともせずに立ちつくしていた。御來迎は、光線が、水蒸氣や塵埃のために屈折されるために起る、という簡單な原理を知っていた。だがその單純な原理のひきおこす、複雜微妙な美に驚かないわけにゆかなかった。それはまた、至が水銀の働きに驚き、自然に対する愛着を感じたのと同じ心理でもあった。彼女は毎日狹い一室に閉じこもり、夫の顏を見飽きるほど見てきたが、この時ほど雄々しくも輝いて見えたことはなかった。

晴雨計も四百六十ミリをさしたまゝ、羊皮部を水銀で埋め、働きをやめてしまった。屋根の棟に針金で堅くしばりつけ、屋内の暖氣でひとりでに雪が溶けるように裝置した雨量計の考案も、やはり下界人の机上の考案にすぎないことがわかった。のみならず風力自記用の蓄電池の素燒の筒も、凍った藥液に押しつぶされてしまった。それをへやのすみから暖炉のそばに移し、そのうえ外線に布まで卷いて保護したけれど、やはり効果はなかったのである。予備蓄電池まで同じ結果となっては、風力の観測もあきらめるほかはなかった。おかゆも湯も、暖炉から離すと凍ってしまうのである。居室は一間に二間疊三枚分だけ、下にわらや、のこ屑を敷いた上にござをひろげ、一枚分は板の間である。まん中に暖炉があって、彼らはそのまわりに寢る。それでも背と腰と足にかいろを当てねば、しのげないのであった。

ふたりは室内の乾燥のため、くちびるは荒れ、鼻血が出た。ことに千代子はのぼせが昂じると、持病のへんとうせんが腫れ出して、くず湯やかゆでなければのどを通らなくなった。

まる一週間、一歩も外出できない日が続いた。たえず十四、五メートルから二十メートル近い風が吹雪といっしょに山頂を荒れまわった。

「ほんとに、目に見えるものなら、この風を下界の人に見せたいものだわ。そして天人のように羽衣に乘ってなりとも、一日でいいから、暖かそうな下界で暮らしてみたいわね。」

千代子はきょうもまた吹きつのっているあらしの音を聞きながら、髪が伸び、青黑くしなび、よごれた夫を見ながら言った。至は室内操櫓器をゆるやかに動かしながら、目はどこか宙に迷わしている。操櫓器は大学のボート選手時代のなごりである。雪に閉ぢこめられた時の運動にと、わざ〳〵運んだものだが、めったに使ったことはなかった。この度はずれた寒さは、運動の意志すら奪い去るからである。

「何を考えてらっしゃるの。」もう一度言うと、至ははっとしたらしく、

「えゝ、なんだ……何か言ったのか。」

とあわてて聞き返した。

「いゝえ、べつに……あなた何を考えていらっしゃいました。」

「おれはね、……九州にいる園子のことを考えていたよ……」と言ったかと思うと、至は顏がぱっと赤らんだのである。それを隠すように、無意識にまた櫓を忙しく動かしはじめた。

「やはりあなたも考えていらっしゃったのですか。」

彼女は胸をつかれたが口には出さずに、默って立ち上がると、毛布の端を上げて外をのぞいた。しかし至は園子のことより、もっと切実な、彼女の病氣のことで頭を占められていた。今はいいが、もっと病勢が進んだらどうしよう。手あてのしようも、救援を賴むこともできないのである。

園子　野中夫妻の子。

「あなた、人の声よ、人の声よ。」窓ぎわにいた千代子が、突然ほとんど泣きだしそうに叫んだ。

「あらしだよ、あらしが岩に当たってうなっているのだよ。」

至はまだ千代子のことを考え続けながら答えた。彼女は立ったまゝ耳を傾けていた。至は櫓を置くと、心が決まったのかすっと立って、

「千代……」と、のどにかゝるかすれ声で呼びかけた。

「今さら改まって言うのもおかしいが……」

そこまで言いかけた時、千代子は両手を上げて、至の胸に倒れかゝった。確かに人声なのだ。叫んでいる。戸をたゝいているのである。至は物置の方へ走った。がそこの内戸さえも凍っていたので、急にあけることができなかった。

「湯を持って來てくれ、人だ、人だ。」

出入口のそばの窓に、熱湯をかけてやっとこじあけた。吹雪がぱっと吹き込み、生氣を失った四人の姿が現われた。窓からはい込んだ四人は、からだが硬直して何もすることができなかったので、ふたりがわらじのひもを解き、荷をおろしてやらねばならなかった。

報効義会の会員松井・女鹿と強力がふたりである。会長の命で慰問に來たのだった。話によると、きのう興平次の家を出て八合めまで登ったが、吹雪のため下の室に引き返し、改めてきょう登って來たということだった。報効義会会員の千島の学術調査と、至の高層氣象の観測は、ともに國民の関心の中心であった。いや発展期にあった國民感情を代表したのが、彼らであったといった方が適当だ。したがって彼らには共通の感情があり、初対面にもかゝわらず、すぐにうちとけて話しあうことができた。そして千島と富士の氣象の似たところなども、互に理解することができたのだった。

エトロフ　ソ連領千島列島中最大の島。

「やっと生きた心持になった。こゝはとてもエトロフどころじゃありませんよ。わしらも千島じゃずいぶん苦労しましたが、まだ〳〵こゝよりはましでしたよ。」かゆを食べ終った女鹿が、たばこに火をつけながら言った。するとさっきから頭痛に弱っていた松井が、

「わしたちがエトロフにいた時、思いがけない船が寄港してくれましたので、何もないけど、とにかく晝飯のごちそうをしたんですよ。するとあとで水夫さんが、記念のためにこの箸をもらいたいと言って、くまざさで造ったつまらぬ箸を、大事そうに紙に包んで行ってくれた氣持は、今でも忘れることができませんね。それを思い出したので、わしも記念として、この箸をいたゞきたいと思うのですよ。」と恥ずかしそうに言った。

「さあどうぞ、よろしかったらまだたくさんありますから。」千代子は笑いながら答えた。久しぶりの下界のにおいで、ふたりは晴れ〳〵とした。両親はじめ知人からの手紙も新聞もあった。がそれらはあとまわしにして、客人の歓待にふたりは知恵をしぼるのだった。四人が寢床にはいってから夫婦は手紙を読み、一つ〳〵に細かく、近状を報ずる返事を書くのであった。また至は沼津測候所と回光儀通信の中止の通知や、中央氣象台への報告、その間にも二時間ごとに観測しなければならないのでその夜はほとんど睡眠の時間はなかった。

翌日、至は九合めまで風の中を送って行った。そして帰ってみると、昨夜の寢不足がたゝったらしく、千代子は青い顔をして寢台に寢ていた。口をあけて見ると、しろうと目にもへんとうせんの腫れが、急に大きくなったことがわかるのだった。

「やっぱり燃えそうもありませんわ。どうしましょう。」千代子は一時間ばかりかゝったが、煙突のないかまどは火が燃えないのだった。

「じゃ、わしが代わって燃すから、おまえは休んでいなさい。」観測のあいまに寝床にはいっていた至が、起き上がってねじはちまきをした。餅米を蒸しているのだ。運動不足や、健康の衰えのため、千代子はもちろん、至も食欲は半減していたが、食べるということは、いつでも最上の樂しみだった。

報効義会会員の訪問以來急に悪くなっていたへんとうせんが更に悪化した。それに何か別の病氣を併発したらしく、顔や脚部にむくみができ、しきりに呼吸困難を訴えだした。器械室の氣溫は零下八度から十度程度で、すきまから風さえはいらなければ、堪えられない寒さではなかった。地面にもみ殼とわらを五寸ほど敷いた上に床板をうちつけ、その上に紙を二重に敷き詰め、更に花ござと毛布を敷いて、居室の床はできていた。寝台はそれより二尺ほど高くしてわらふとんをしつらえてあった。毛布や夜具を六、七枚も重ねるが、まだ寒かったのは風が侵入して溫氣を運び去るからだった。千代子は夜具の重みさえ胸部を圧迫すると言いだした。熱も七度から八度を上下して、日に〳〵悪くなるばかりである。いちばんいけないことは、堅い食物はもちろん、湯さえのどを通らないほど、へんとうせんの腫れが大きくなったことだった。

「何を考えていらっしゃる、また園子のこと。」暖炉の前で考え沈んでいる至に話しかけた。

「そんなことじゃないよ。ほら、ぼくたちがまだ子どもの時、夕立に降りこめられて、お宮のいちょうの木の下で、びしょぬれになったことがあったろう。あの時おまえが妙につんとしているので、おれは何を怒ってるんだろうと、ひどく氣にしたことがあったが、今それをひょっくり思い出したんだ。何をあんなに怒ったのか覚えているかい。」

氣軽さを装いながら枕もとにすわり、千代子の額に手を載せながら言った。すると実に突然、千代子はわっと泣きだし、なんとなだめても泣きやまないのだった。

「また熱が出てもしらないよ。今さら泣くことなどないはずだ。」と声を荒くした。

「いゝえ、あなたはそんなこと考えていたのじゃないわ。もっとたいせつな悲しいことを考えていたのでしょう。わたし、こんなにやっかいをかけてほんとにすみません……。」

千代子はふとんで顔をおゝった。至は腕組みをして、静かに畫まもつけ放しのランプの火を見ていたが、うゝん……と腹の底からうめいた。そして決心がついたように枕もとに近寄ると、

「千代、改めて言うのもおかしいが、おまえの命はおれにくれたのだね。確かにそうだね。」と震え声で言った。

「えゝ」千代子はいつがもそのことを言いだしかけて、やめたことがあったように思った。

「このまゝでも死ぬかもしれない……どうせ死ぬものなら、いっそおれの手にかゝって死んでくれないか、成功するかしないか二つに一つ、おれが療治をしてみようと思うんだ。」

「えゝ、どうぞ。」

千代子は至がびっくりしたほど素直に答えた。彼女は全身全霊をもって夫に寄りかゝっていたのである。彼はすみから道具箱をひき出し、ランプのあかりで咽喉部を照らし治療した。

半日は出血が止まらなかった。ねば〳〵したつばに混ざった血液が、五分、十分ごとに一塊ずつ出てきた。しかし翌日からは不思議なほど熱は下がり、少しずつ流動物も食べられ、したがって元氣も増してゆくのだった。

……氷雪堅く閉ぢこめて、光陰を送り天上音信を絶ざれば、世の風色もわきまへず、暗々たゞる石窟に、蠢爾として動き、食満々と與へざれば、身心尭乎と衰へたり……この身は富士ィの根の、富士ィの根の、雪にかばねをうずむゥとも、何か恨みむ……

至は謠曲景清をもじって、自分の境涯をうたっていた。室内操櫓器の練習も健康の衰えた今は過激にすぎるので、謠曲ぐらいが手ごろの運動だった。それはまだ学生で帰省した時、千代子の父の只円に習ったものだった。千代子が健康を回復すると、今度は至が同じ病氣にとりつかれ、からだのあちこちに浮腫ができて食欲がなくなった。それに熱もあったが、まだ寝こむことはなかった。浮腫は雪どけ水からくる脚氣の一種だろうと推測して、くず湯とあずきで千代子の病氣をなおした経驗から、彼も米食は一回にしていた。もと〳〵十一月にはいってから、ふたりとも食欲が急に減って、日に二度の食事もかゆ一杯にみそしる・うめぼしで、その度をすごすと、胸部に圧迫を感じ呼吸が苦しくてたまらなかった。

二

十一月の氣温は最高が零下八度六、最低は零下十度四、氣圧は晴雨計の損傷でわからなかったが、とにかく平地では、冬季に高くなるのと反対に、山頂では低くなる傾向があり、四百六十ミリ以下だと推定された。しかし天氣は十月ごろよりはよくなって、風だけはあい変わらず砂や小石を飛ばしていたが、晴れの日が多かった。

やがて十二月にはいった。氣温は朝六時の最低時には、だいたい零下十五、六度に下り、最高の午後二時でも、零下十四度を上ることはなく、十四日の午前六時のごとき、零下二十七度八を観測したこともあった。

至は次第に浮腫がまして、八度近くの熱が毎日往來した。食欲は極度に減退して、十二月にはいるころにはくず湯・あずき・うめぼしぐらいを、日に一回食べるだけになった。ふたりの生活にとって最大の慰安であった食欲さえ失って、観測だけが残された楽しみになった。もはや観測は義務ではなくなった。生きるために必要なものは食物だけでない。からだの運動と精神の運動があい伴なわねば生命は維持できないのだが、観測はからだばかりでなく、精神の運動にとっても欠くことができないものとなった。

水銀は往々、自然というえたいのしれない巨大な機構の秘密を、何氣なく現わすことがあった。第一、水銀の微小の動きそのものが自然の秘密を語っていることを思うと、至は祈らんばかりの熱心さでこの妙な金属に引きつけられていった。熱が八度七分の時も、両足がしびれている時も、時間がくると何かに憑かれたような氣味悪い熱心さで、野帳を取り上げるのだった。

十二月十二日、駿東郡郡会議員勝又惠造、強力の勝又熊吉のふたりが登って來た。惠造は元氣のいいさっぱりした男で、至の顔を見るといきなり、

「野中君、まだ生きていたのか。それはよかった。なに、君が死んでいても仕方がないが、それではちょっとおれが困るんだ。」

と冗談を投げつけた。彼は「君が生きているうちに必ず登山してみせる。」という約束が実現できたのを、誇りたいのだった。実際誇るぬうちもあった。

「ふたりだけじゃないよ。十人ばかりいっしょだったが、筑紫署長や弟の清さんたちは、八合めで休んでいるよ。それでふたりが手紙と軽いみやげだけを預って來たんだ。ところで君はだいぶ顔が腫れてるじゃないか。」

惠造は全國の未知の人々から來た手紙の束を取り出しながら言った。熊吉は荷物の中から布子を出して千代子に渡した。これは與平次の娘つるが、千代子のためにわざ〳〵縫ったものだった。惠造たちは一日、至のむくんだ顔を見て、病氣とさとったのである。

「脚氣をやっているが、家内もなおった経驗があるから心配することはないよ。」

何氣ないように笑ってみせた。するとふたりはすぐに下山のことを勧め出した。君の壯挙は全國の評判になっている。もしものことがあったら、富士山を自分の家のように心得ている地元の不名誉だというのである。しかし評判が高ければ高いほど、この試驗に及第しなければ、この次の本格的な事業の妨げになるだろう。たとえ死んでも下山しないから、決して病氣のことはだれにも口外してくれるなと、至は懸命になってくどくのだった。ようやく納得してすぐ下山するふたりに、至たちははし り書の手紙を託した。あとで未知の人からの手紙を見ると、激励文の間に五十銭かわせや、一円の札がはいっているのもあった。この日、弟の清は惠造のあとを追って、ひとりで八合めを出発した。しかし駒が岳の近くで帰って來る惠造らに会ったので、兄に面会することができずに引き返したが、激しい凍傷にかゝって、冬じゅう、人力車に乗って大学に通わねばならなかったということである。

十二月二十一日は至を養育した祖父の命日だったので、彼は紙に「三友軒閑哉居士」と書いては り、ありあわせの品々を供えて礼拜した。と、ちょうどその時、人の声がしたので出てみると、見知りの強力ばかり四人そろって、窓の外に立っているのだった。

「東京から先生方が迎えに來ましたが、八合めに閉ぢこめられていますから、あす、こちらにみえます。」熊吉が窓口で言った。あれから十日たっている。やはり勝又惠造が病氣のことを氣象台や縣廳に報告したのだと、至は直感した。

「熊吉、おまえたちは……」それ以上、息がきれて声が出ないほど至は興奮した。するとそれを察した四人は、「とにかく自分らは言いつかって知らせに來ただけだ。」と言いわけをして、逃げるように引き返してしまった。

「だれが迎えに來ようと下山するものか。おまえもそのつもりでいろ。」

と千代子にかみつくように命じると、それからはもう一言も口をきかずに、たゞ定時の観測に立つほかは、じっとへやの一隅を凝視しているばかりだった。前ぶれの通り翌日、一行は登って來た。和田技師・御厨（御殿場）署長・筑紫警部・平岡・菱本両巡査・強力十二人。それだけで彼らの決意も察することができるのだった。彼らは観測所に着くと、至の同意も得ないうちに強力が総がかりで、十一月から一度も開いたことのない出入口をこじあけた。そして和田技師がまっ先にへやに飛びこむとよく聞きとれないことを言いながら至の手を握った。和田技師が顔をさっと斜めに伏せたかと思うと、ほおをたら〳〵と涙が傳わった。至の変わりようが彼には正視に耐えなかったのだろう。顔など洗ったことがないうえに、ひげは伸びほうだいだった。油氣のない髪は乱れ立ってくちびるは白くかわ

き、鼻の穴には血の塊が着き、顏全体が腫脹で氣味惡い光を帶び、目は細くなっていた。それにもかかわらず、例の精悍な射るような眼光だけが、八十幾日前の彼のおもかげをたゝえているのだった。

和田技師は署長を紹介した。そして官憲の力を賴んででも、下山させないではおかれない强硬な態度で、山を降りるように勸めた。

「せっかくですが下山できません。そのわけは今さら申しあげる必要もないと思います。これだけの手數をかけてくださるくらいなら、藥でも運んでくださった方がありがたかったでしょう。藥があればぼくの病氣はなおるし、したがって越年ということも、今までの經驗では難事ではありません。げんに家内でさえ病氣に勝って、今まで滯在できたのですから。」

「志は尊重しますが、われ〳〵としては、危險に瀕している人命を保護する義務があるのですから、ことしは下山されて、來年更に倍の準備をして、越年されることをお勸めします。」

筑紫警部も威嚴と恩情を織りまぜて說くのだった。至は更に哀願した。また千代子もあと一箇月模樣をみたうえでと賴んだが、十分の支度をして來た一行に、應じる色はみえなかった。外は日が暮れかゝっていつもの吹雪が荒れ狂っていた。强力たちは風力計・風信器・最低寒暖計を殘して、測器の荷造りを始めていた。山頂を吹きすぎる風が、高空に跡を絕ってしまうように、八十四日間の生死を越えた辛苦が、跡をも留めずに散華する寂しさにうたれ、張りつめた性根が一瞬のうちに、がた〳〵と音を立ててくずれるのを感じた。

彼のからだは幾重にも毛布で卷かれ。ずさんも深くしばりつけられた。「先生、お氣の毒ですが。」熊吉はこう言いながら廣い肩をさし出した。彼は一本の棒となって、熊吉に負われ室を出て行った。そして馬の背まで歩いた時、暮れかゝった回光台の岩土に、昆虫の觸覺のように、風力計が中空に孤立しているのをふり返った。その時初めて彼の兩眼からとめどなく涙があふれた。それを隱そうともせず、熊吉の背に顏を押しつけてむせび泣くのだった。

「先生に泣かれるとわしらも力がぬける。どうか泣きやんでください。」

熊吉がたまらなくなって子どものようにせがんだ。彼は何も見まいとして目をつぶった。

すると氣力の衰えたからだは、さっきからの吹雪と、戸外の寒氣にひとたまりもなく、そのまゝ眠りこもうとするのだった。

やがて胸つき八丁の急坂にかゝると、熊吉の胴になわをかけて、ふたりの强力があとからさゝえて文字通り一足一足踏みしめて下るのだった。一歩すべれば氷盤の上をどこまで轉落するか見当もつかない。後からなわを引いている者も、自分がすべらない努力で精いっぱいである。至は急坂にかゝると自分の重みでいよ〳〵胸を圧迫してきた。それに吹雪はいよ〳〵吹き荒れて、足先が寒さを通り越して皮を剝ぐ痛みになった。

「熊吉、苦しい、苦しい。」

至はとう〳〵がまんできず声をあげて訴えた。「先生、先生。」ひとりで下るにもたいへんなのに、十七貫もある至を負ぶっている熊吉も死物狂いで、たゞ意味のない答をするばかりだった。

「熊吉、息ができない、あゝ、たまらない。」至は夢中に叫び續ける。人々はもうばら〳〵になっていた。千代子も和田技師も、吹雪とやみのために声も聞えないのである。

「おろしてくれ、おろしてくれ。」至の呻吟は風にちぎれた。すると熊吉は、「先生、わしもたまらな

い。」と言ったかと思うと、岩かどに踏みとゞまってわっと声を立てて泣きだした。すると至もまたこらえていた涙をとゞめかね、大声で泣きだしたのである。彼らはもう裸になった人間も同様であった。体裁も飾りもなかった。それを後にいる強力たちが励ましながら、また一歩一歩足もとを探りながら下るのだった。

そのうちに至のうめきが聞えなくなったのを、ふと熊吉が氣づいた。至は氣を失っているのだった。

「先生、先生。」三人がかりで至をゆするとやっと正氣に返った。

「目をつぶってはいけませんよ。しばらくのがまんです。なんです、このくらいで。」

彼も目をつぶれば最後だと思う。まだ〳〵死にたくないと、たるみかゝる瞼を懸命に開こうとするのだった。吹雪が吹きこむたびに瞼を閉じる。そのまゝ氣が遠くなりかけるので、わざと寒風に向かって目を開く、凍傷にかゝっても仕方がないと、あてのない虚空に向かってありたけの力をしぼり出す。それからむりに胸を張って苦しい息を吸いこもうとするのだった。

八合の石室についたのは夜中だった。冬じゅう雪に埋まって存在さえわからないこの室は、きのうから村民の力で、戸をこじあけてたき火をしていた。かつぎこまれた至は、やはり氣を失っていた。千代子は先に着いて寝ていたが、熊吉が肩からおろすと同時に、人前もかまわず泣きだした。夫は死んだものと思って飛びついた。至はしばらくして正氣づいたが、やはり目に凍傷をうけてまっかに充血していた。彼は眼球を動かしてさえ激痛を感じたが、頂上にいる時より呼吸がらくになって、いくらか病勢を持ち直して、危険状態は脱したらしかった。

こうして八合めに一泊した一行は、また石室ごとに少しずつ休みながら下った。今度は胸を圧迫しないように、後向きに至を乗せることにした。そして三合めでは中畑・滝が原の村民をはじめ、深良村の瓜生医師も待っていて應急手当を加え、更に二合五勺からは担架に乗せて、湯たんぽなども入れたので、至は次第に元氣をとりもどし、訴え続けていた呼吸困難も忘れてしまったのである。

そしてほとんどお祭り騒ぎで、佐藤與平次の家に迎えられたのは、夜の九時ごろだった。そこには父の勝良・三浦謹之助博士・縣の役人・有志らが待っていた。

（「現代小説選」による）

三浦謹之助　医学博士。

研究の手引

一、最も感動した場面について話しあう。

二、登場人物の性格を調べてみる。

三、この文がわれ〳〵に感動を與える理由について考える。

四、「わが生の目標」あるいは「人の事業」という題で文を書いてみる。

Approved by Ministry of Education
(Date Oct. 24, 1949)

教育文化研究会

会長　國立國会図書館館長　金森徳次郎
主幹　東京教育大学教授　石山脩平

國語科編集委員

東京教育大学附属中学校教諭　長谷川敏正
東京都立第一女子高等学校教授　渡辺茂
成蹊大学教授　飛田隆
東京都立第十高等学校教諭　鳥山榛名
東京教育大学附属高等学校教諭　和田邦五郎
同　宮崎健三
お茶の水女子大学附属高等学校教諭　稲村テイ
東京都目黒区立目黒第八中学校教諭　大村浜

一、出版權設定登錄済
二、意匠登錄出願中
三、無斷轉載を禁ず

昭和二十四年七月十九日　発行
昭和二十五年二月一日　再版印刷
昭和二十五年二月五日　再版発行

「國語」高等三年（一）
定價　金十八円十錢

著作者　東京都新宿区市谷砂土原町一ノ二番地
教育文化研究会
代表者　金森徳次郎

発行者　東京都新宿区市谷砂土原町一ノ二番地
教育図書株式会社
代表者　小松謙助

印刷者　東京都北区稲付町一ノ二〇八番地
二葉印刷株式会社
代表者　大野治輔

発行所　東京都新宿区市谷砂土原町一ノ二番地
教育図書株式会社

昭和25年度用　教科書番号 高國1207

教育図書株式会社

広島大学図書
0130449682